宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第５集

高鍋城跡（嶋田地区）

嶋田地区災害関連緊急急傾斜地崩壊対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９７・３

宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用につきましては、日頃より御理解・御協力をいただき厚く御礼申し上げます。

この度宮崎県教育委員会では、高鍋町の嶋田地区災害関連緊急急傾斜地崩壊対策事業に伴い、高鍋城跡の発掘調査を実施しました。

高鍋城跡は、県下でも延岡城跡や飫肥城跡と並び数少ない近世の石垣造りの城として知られていましたが、今回の発掘調査によって、さかのぼって中世のころからの城造りの状態を確認することが出来、築城時期や曲輪の使い方などさまざまな問題を投げかける貴重な調査成果を上げることができました。

本書が学術資料としてばかりでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の方々に心からの謝意を表します。

平成９年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　藤本健一

凡　　例

1．本書は、平成７年度に宮崎県教育委員会が実施した、嶋田地区災害関連緊急急傾斜地崩壊対策事業に伴う高鍋城跡（嶋田地区）発掘調査報告書である。

2．本書の執筆・編集は吉本正典が行った。

3．本書で使用した遺構実測図等の現地における記録は、吉本正典、松林豊樹、久木田浩子による。

4．本書で使用した写真は全て吉本による。

5．遺物の実測・拓本・製図は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。実測・拓本については、整理作業員の補助を得た。

6．本書における方位は、第１図、第２図を除き、全て1996年の磁北である。第２図のそれは座標北である。

7．第１図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図『妻』『高鍋』による。

8．土層の色、その他色の表記は、小山正忠・竹原秀夫編・著『新版標準土色帳』を参考にしている。

9．図面の縮尺は各図ごとに示している。なお、１／３は33％縮小のことである。

10．出土遺物および調査記録類は、全て宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。遺跡の略号はＴＪＯである。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに ---- 1
　第１節　調査に至る経緯および調査組織 ---- 1
　第２節　遺跡の位置と環境 ---- 2

第Ⅱ章　調査の記録 ---- 4
　第１節　調査区の設定 ---- 4
　第２節　各調査区の状況 ---- 4

第Ⅲ章　まとめ ---- 20
図　版 ---- 27

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置（1/25,000地形図『妻』・『高鍋』より） ---- 1
第２図　調査区設定の状況（1/1,250） ---- 3
第３図　郭１の状況（1/150） ---- 5
第４図　郭１出土遺物（1）（1/3） ---- 5
第５図　郭１出土遺物（2）（1/3） ---- 6
第６図　郭２の状況（1/150） ---- 7
第７図　郭２出土遺物（1）（1/3） ---- 7
第８図　郭２出土遺物（2）（1/3） ---- 8
第９図　郭２出土遺物（3）（1/3） ---- 9
第10図　A・Bトレンチ東壁層位図（1/50） ---- 11
第11図　Aトレンチ下層面の状況（1/50） ---- 12
第12図　Bトレンチ下層面の状況（1/50） ---- 13
第13図　Cトレンチ下層面の状況（1/50） ---- 14
第14図　郭２下層出土遺物（1）（1/3） ---- 15
第15図　郭２下層出土遺物（2）（1/3） ---- 15
第16図　郭２下層出土遺物（3）（1/3） ---- 15

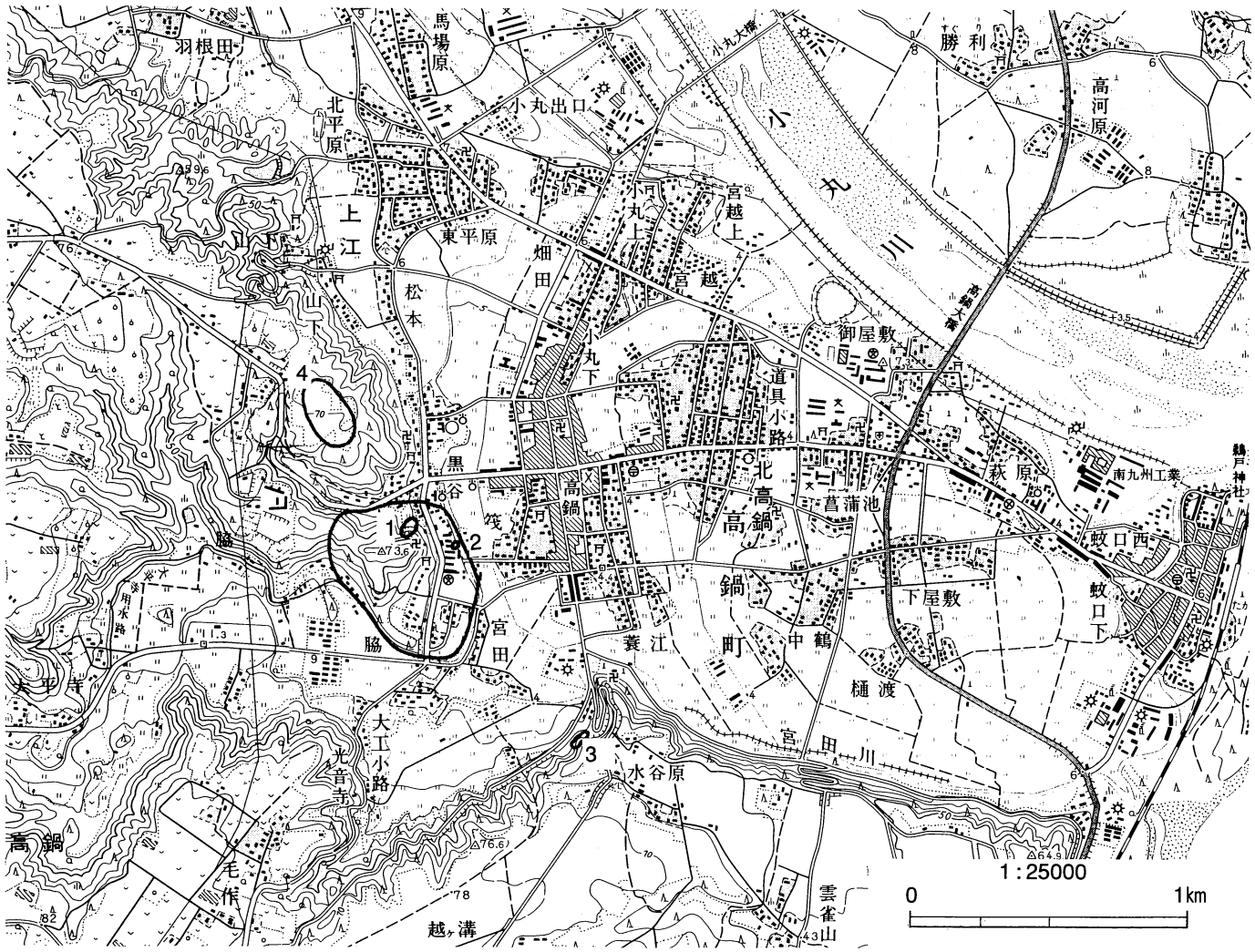
第17図　郭３出土遺物(1/3) ---- 17
第18図　郭４出土遺物(1/3) ---- 18
第19図　郭５の状況(1/150) ---- 18
第20図　郭５出土遺物(1)（1/3） ---- 19
第21図　郭５出土遺物(2)（1/4） ---- 19

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯および調査組織

平成７(1995)年11月、高鍋土木事務所が高鍋城北東側の崩壊箇所の急傾斜地対策事業を行うことを高鍋町教育委員会社会教育課が知り、高鍋城跡の一部であると高鍋土木事務所と宮崎県教育委員会文化課に連絡した。

その後、高鍋町中央公民館にて関係機関による協議が行われた。高鍋土木事務所は、崖面の崩壊が進み下の民家が危険な状態にあるため、既に６月に事業申請（申請時は城跡の一部であるとの認識はない）を行い、９月末に事業認可を受けており、災害関連のため繰越しができないことから、12月～３月の工期で工事を実施したいとの見解であった。結果として、工法上、現状のままで保護するためには工費が４倍ほどかかることや、崖下に民家があるという危険な状況のために、調査による記録保



１．高鍋城跡（嶋田地区）　２．高鍋城下遺跡　３．水谷原遺跡
４．大戸ノ口第2遺跡

第１図　遺　跡　の　位　置（1／25,000地形図『妻』『高鍋』より）

存もやむなしとの結論に至った。

発掘調査は、宮崎県教育委員会が調査主体となり、平成８年２月１日から平成８年３月25日までの間実施された。さらに整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターにおいて行われた。調査組織は以下の通りである。

教育長	田原　直廣
教育次長	八木　洋
	中田　忠

（発掘作業・平成７年度）

文化課長	江崎　富治
課長補佐	田中　雅文
主幹兼庶務係長	高山　惠元
主幹兼埋蔵文化財第二係長	岩永　哲夫
埋蔵文化財係主任主事（調査）	吉本　正典
主事（調査）	松林　豊樹　　久木田　浩子

（整理作業・平成８年度）

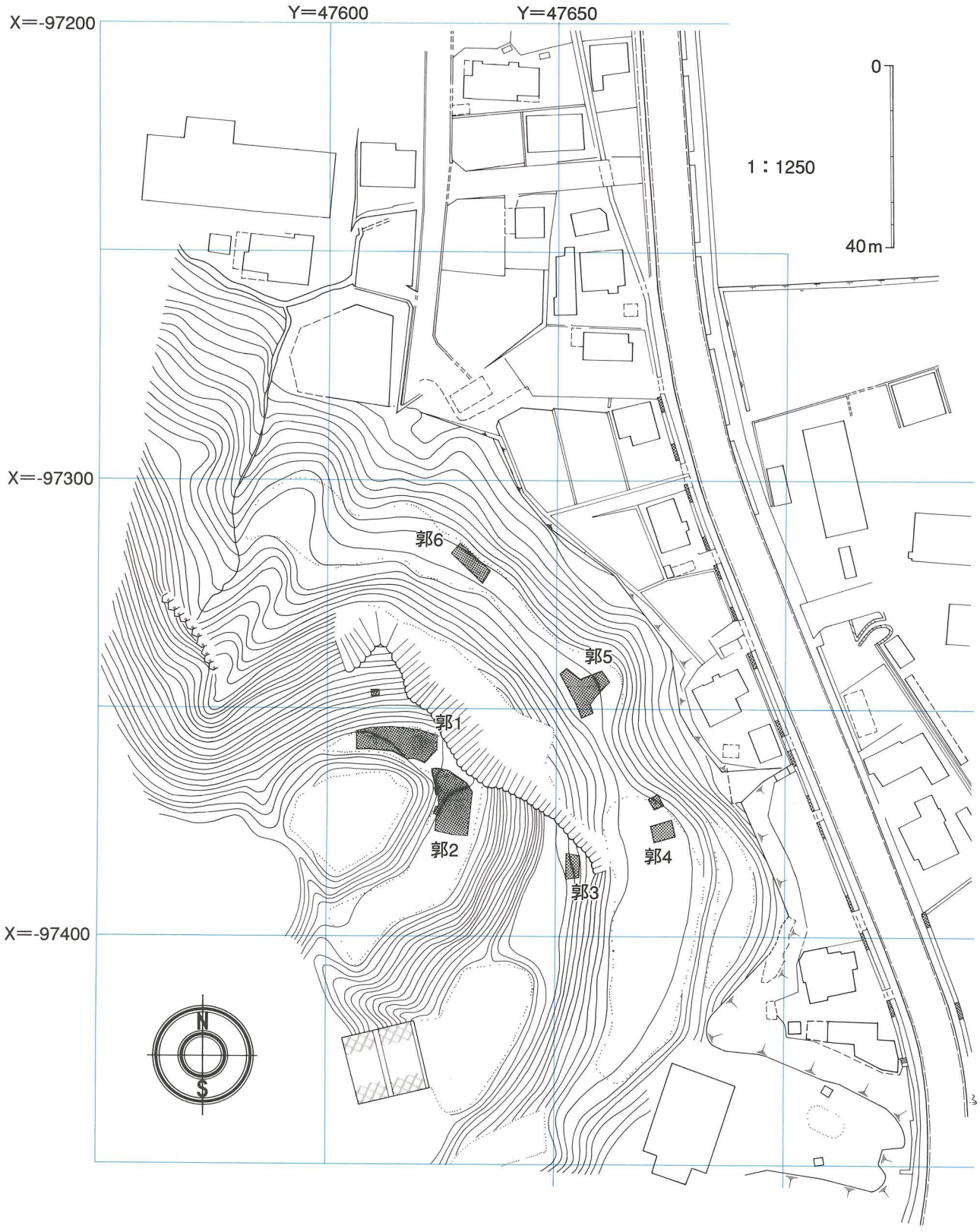
埋蔵文化財センター所長	藤本　健一
庶務係長	三石　泰博
調査第二係長	北郷　泰道

第２節　遺跡の位置と環境

高鍋城跡は宮崎県児湯郡高鍋町大字上江・南高鍋に所在する中世～近世の城館跡である。近世以前は財部城と呼ばれた。

高鍋町は宮崎県のほぼ中央部に位置し、町域を小丸川、宮田川が東流して日向灘に注ぐ。両河川の河岸には沖積地や洪積台地が広がり、比較的なだらかな地勢を呈している。市街地は小丸川と宮田川の間の沖積地上にのる。

高鍋城は市街地の西方の、沖積地に突き出た丘陵状の台地の端部を中心に築かれている。西側には堀切を築き、台地と城域を大きく切り離している。本丸と呼ばれている曲輪は、近世になって居館として使われたところで、礎石が一部残っているのが確認できる。さらに高所の曲輪（石塁が現存）に三層櫓が存在したという伝承がある。なお、二の丸は現在、舞鶴神社、歴史総合資料館のある一帯、三の丸は現在の高鍋農業高校敷地内で、その東側に水堀が残っている。さらに、その東側を流れる塩田川の右側で小規模ながら発掘調査が行われており、近世の頃は水田であったことが確認された。これは、



第2図　調 査 区 設 定 の 状 況

絵図に描かれた状況と一致するという。[1)]

高鍋の地は古くは財部と呼ばれ、築城者は不祥だが古代、中世の領有関係から財部土持氏によると考えられている。そして中世以降、土持氏、伊東氏、島津氏と所有者が交替している。天正15（1587）年、豊臣秀吉の九州平定のすえ筑前より新納院（財部を含む当地一帯の院名）および櫛間院に転封となった秋月種長は当初櫛間城に入るが、のち慶長９（1604）年に財部に移り、近世高鍋藩の中心となった。この頃から近世城館として改築されていったと考えられる。なお、高鍋、あるいは高鍋城という名は、３代藩主の種信の代に改められたという。[2)]

（註）

１．『宮崎県文化財調査報告書』第37集　宮崎県教育委員会

２．『角川日本地名大辞典』45　1986　角川書店

第Ⅱ章　調査の記録

第１節　調査区の設定

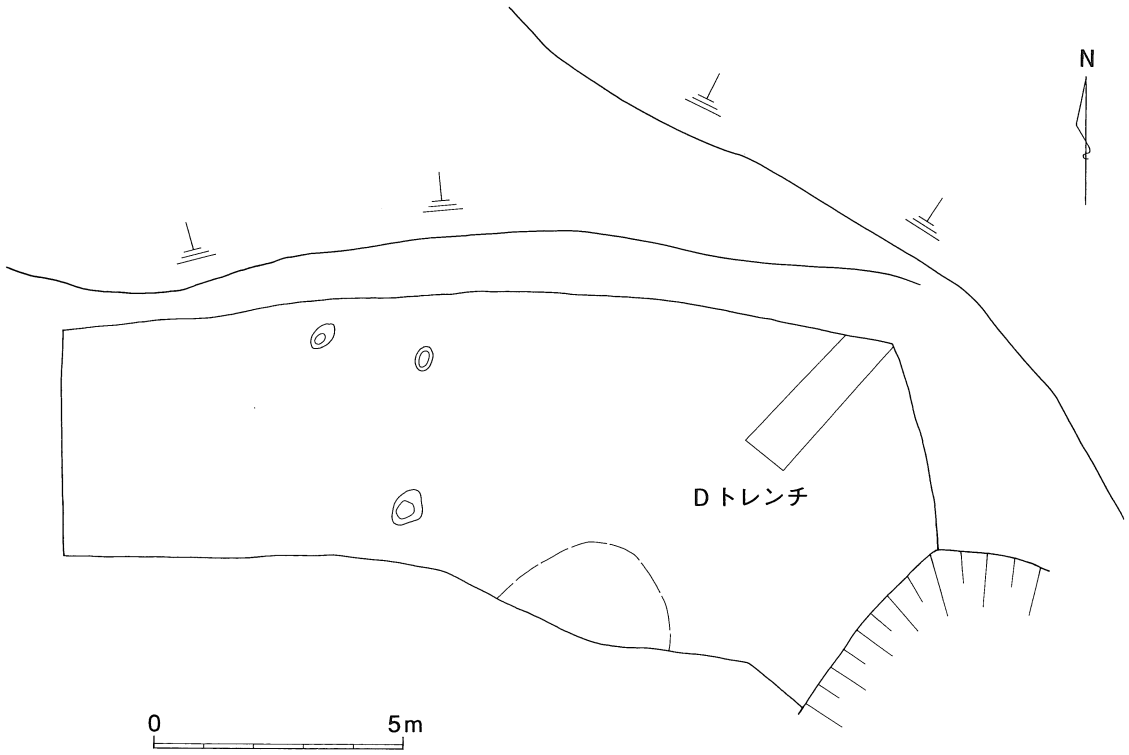
調査対象地は、高鍋城の北東側に位置する。現況では地山むき出しの急崖となっており、大きくは上下二段の小さな平坦面が認められた。調査に際しては、上段より郭１・郭２…と仮称することにした（第２図）。

調査開始時に地表面観察を行ったところ、横転した木の穿った穴の下面に基盤と思われる礫層が認められた。それにより、表土を除去すると直ぐ基盤層があらわれると考え、掘り下げにはさほどの期間・労力を要しないであろうと判断した。ところが、実際には、基盤と考えた礫層は後述する通り一種の造成に伴うもので、その中から遺物も多数出土することが確認された。また、石組み列などの遺構も検出された。しかしながら、第Ⅰ章に述べたような状況（期間不足、繰越し不可）があり再度協議を行うなどの努力もあったが、結果として下層の調査は不十分なまま終えざるを得なかった。若干、施工勾配を急にすることによって、郭１・郭２の工事に伴う切りの線が当初の計画より下手（東）側に変更されたことがせめてもの救いであった。

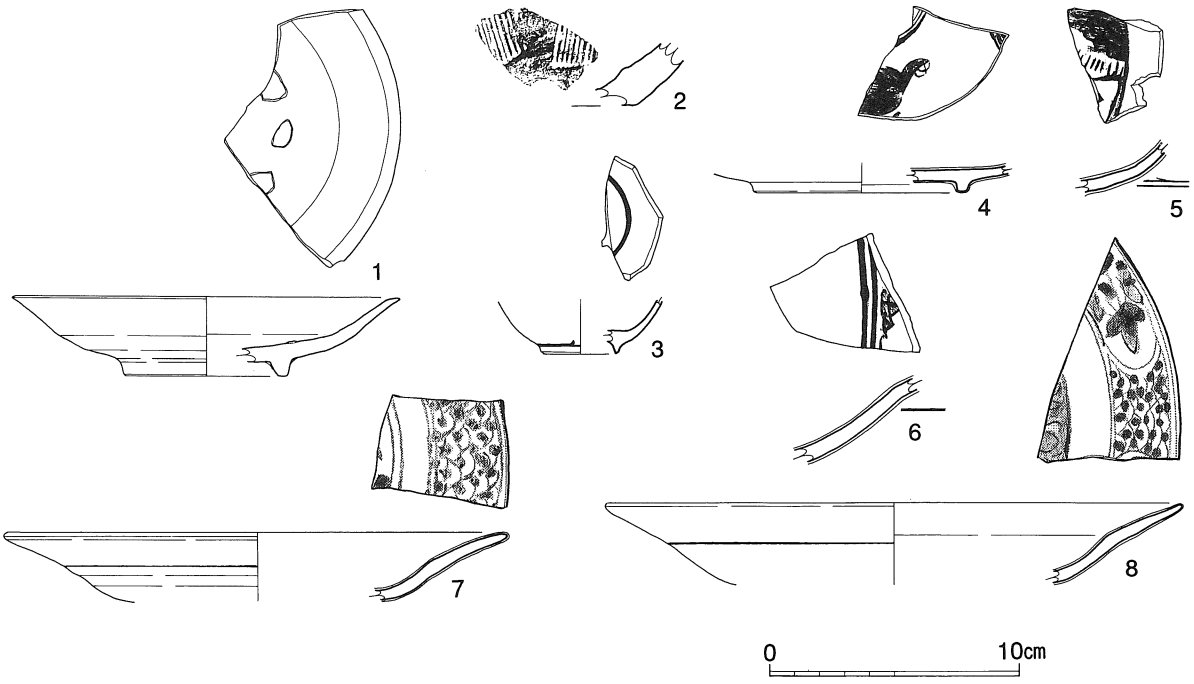
第２節　各調査区の状況

１．郭１（第３図）

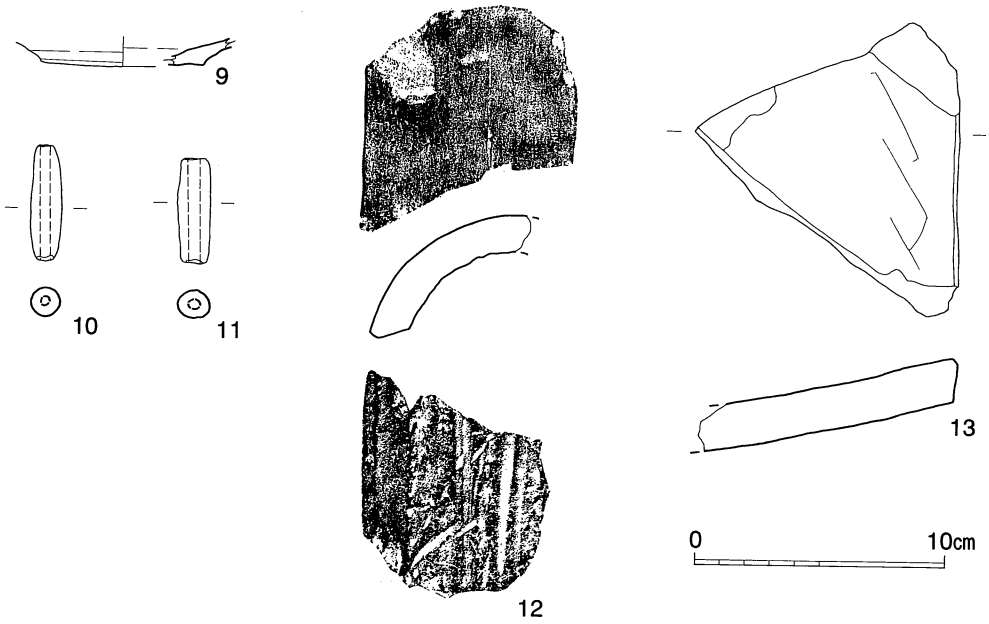
標高約54mと、今回の調査区の中では最も高所にあたる。樹根を多く含む表土を人力で除去すると、概ね平坦な面を検出することができた。腰曲輪状の平坦地を捉えることができよう。その平坦地は地山を削って造出されたと考えられるが、北東側（斜面側）については礫混じり土による盛土造成を施している。造成の状況を確認するためにトレンチ（Ｄトレンチ）を設定し、基盤まで深掘りを行



第3図　郭　1　の　状　況（1／150）



第4図　郭　1　出　土　遺　物（1）　（1／3）



第5図　郭　1　出　土　遺　物　（2）　(1／3)

った。その結果、造成土中からも若干の遺物が出土している。

尚、この郭１では表土の落ち込みが数カ所認められたのみで、人為的な遺構は認められなかった。ただ、安全確保のために掘り下げを実施しなかった斜面に、棚などの施設があった可能性も残る。

さらに、この郭１から北側にのびる尾根上にトレンチを設定したが、表土下が地山（基盤礫・粘土の崩落土）となり、遺物等の出土は皆無であった。

郭１の出土遺物は、各種陶磁器類、土師器、近世瓦、土錘など（第４・５図）。

１は白磁の高台付皿で、高台と内面見込みに目跡が残る。２は陶器質の摺鉢の底部。３は染付の小碗、４～８は染付の皿・盤である。４は高台のほぼ全面に砂を付着させる。内面には玉取獅子文を描く。７・８は内面に青海波文や唐草文を描く。９は土師器の杯。底部はヘラ切り。10・11は土錘。それぞれ5.8ｇ、6.9ｇ。12・13はいずれも近世の丸瓦と平瓦で、灰黒色を呈する。

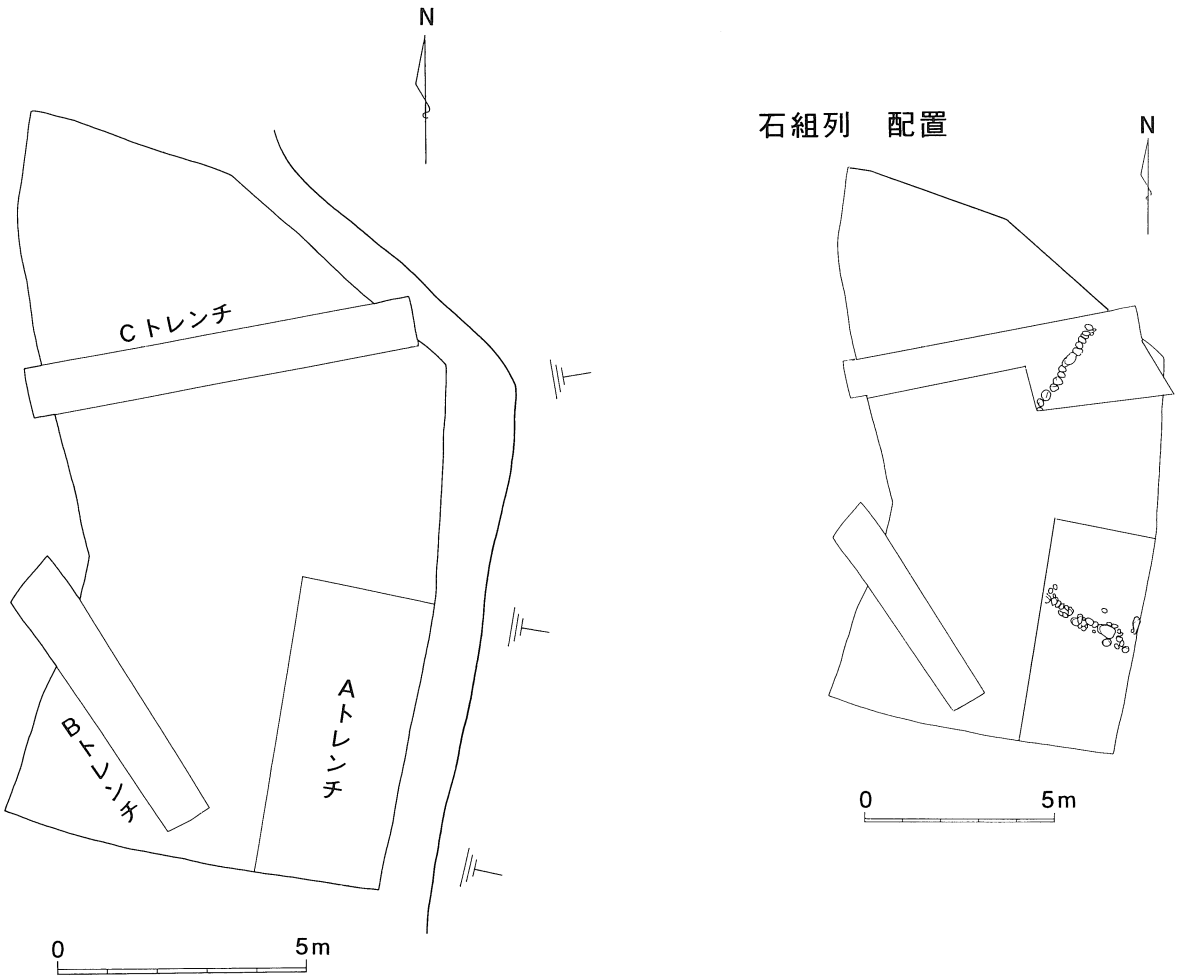
２．郭２（第６図）

郭１の南東側に位置する。標高は約50～51ｍで、郭１よりも一段低い。状況は郭１と同様で、表土を剥いだところ、腰曲輪状の平坦地を捉えることができた。平坦地は調査区の南西側に続いていく。

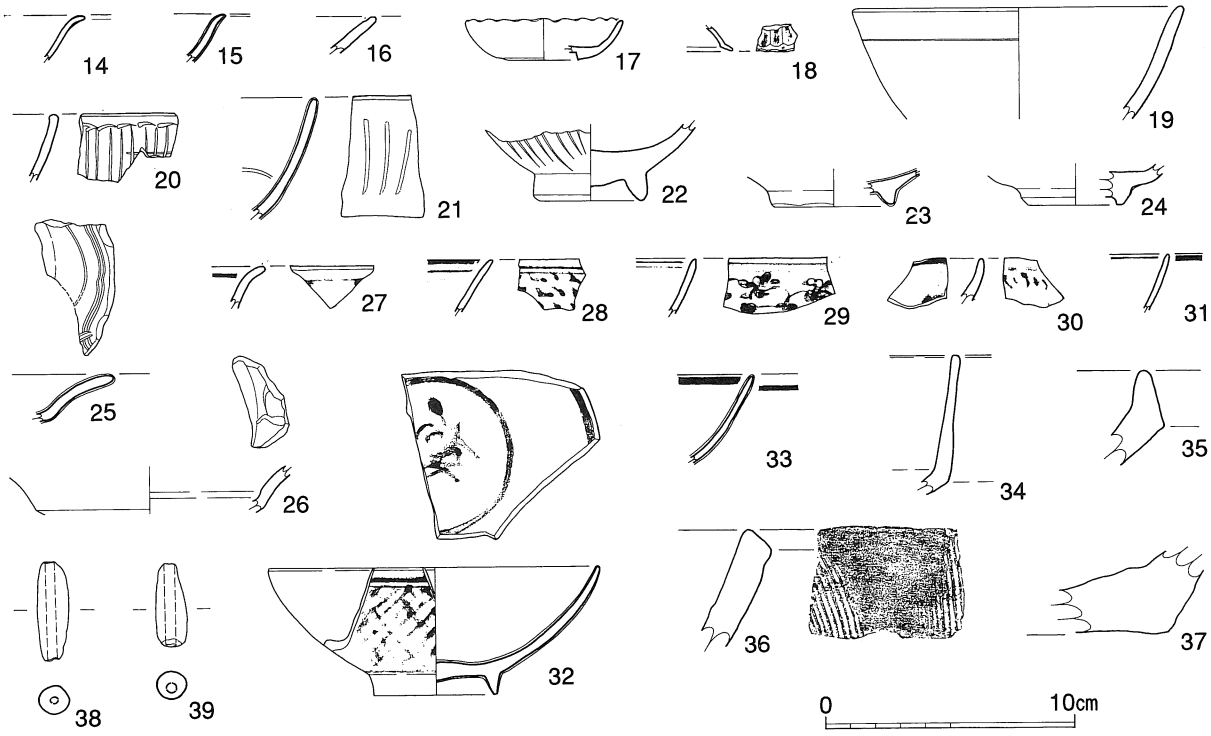
また、トレンチ探査の結果、東側（斜面側）において、礫混じり土等による造成土層が認められ、層中から多数の遺物が出土している。ところが、前述の通りの理由から、下層の調査についてはＡ・Ｂ・Ｃの３か所のトレンチ部分のみにとどまった。

下層の状況について、トレンチの層位断面から見ていこう（第10図）。

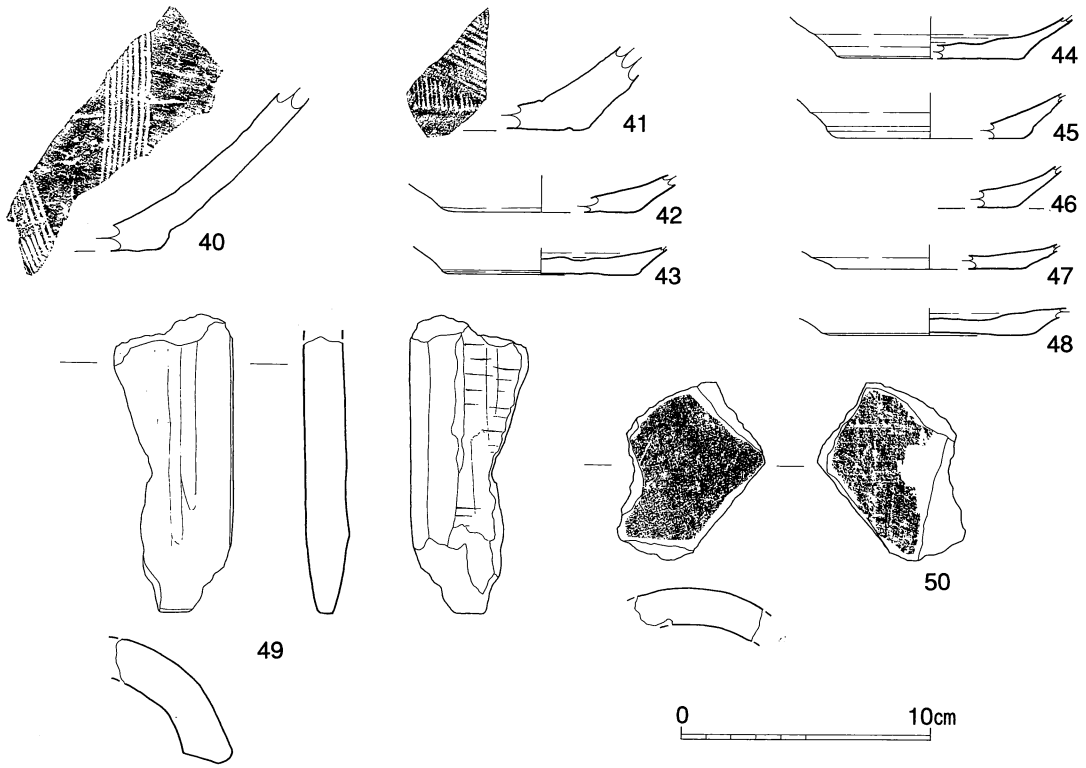
Ａトレンチ東壁では、中央部の最下面に基盤の岩層・粘土層を掘り込んだ段落ちが見られ、その上位に黒褐色土（ｗ・ｘ）が堆積している。この黒褐色土からは土師器の杯が多量出土している。



第6図　郭　2　の　状　況（1／150）



第7図　郭　2　出　土　遺　物（1）（1／3）



第8図　郭　2　出　土　遺　物（2）（1／3）

さらに、最下面から若干浮いた位置に石組み列が築かれており、その南側には縞状の褐色・黒褐色土（o・q）が、北側にはにぶい黄色を呈する礫層（1・基盤層の再堆積層か）が認められた。

そうした状況から、新しい順に、表土を剝いだ段階で検出される近世の面、下層の石組み列、土塁（f・h）の築かれる面、最下面の段落ちの築かれた面という3時期にわたる造作の跡が想定できよう。そこで、この郭2については、近世面、下層の石組み列や土塁の築かれる面（Ⅱ期とする）、最下面（Ⅰ期とする）という3つの構築面・時期を設定して記述していく。

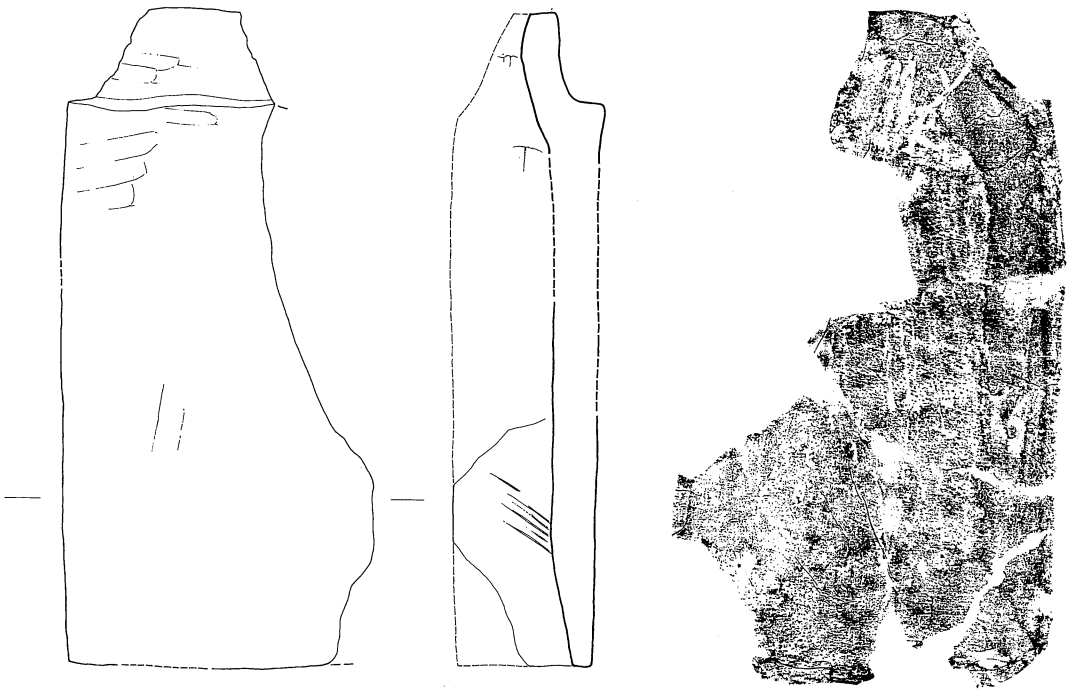
(1)　近世面

建物等は検出できなかったが、郭1と同様、未調査である斜面に、諸施設があった可能性もある。

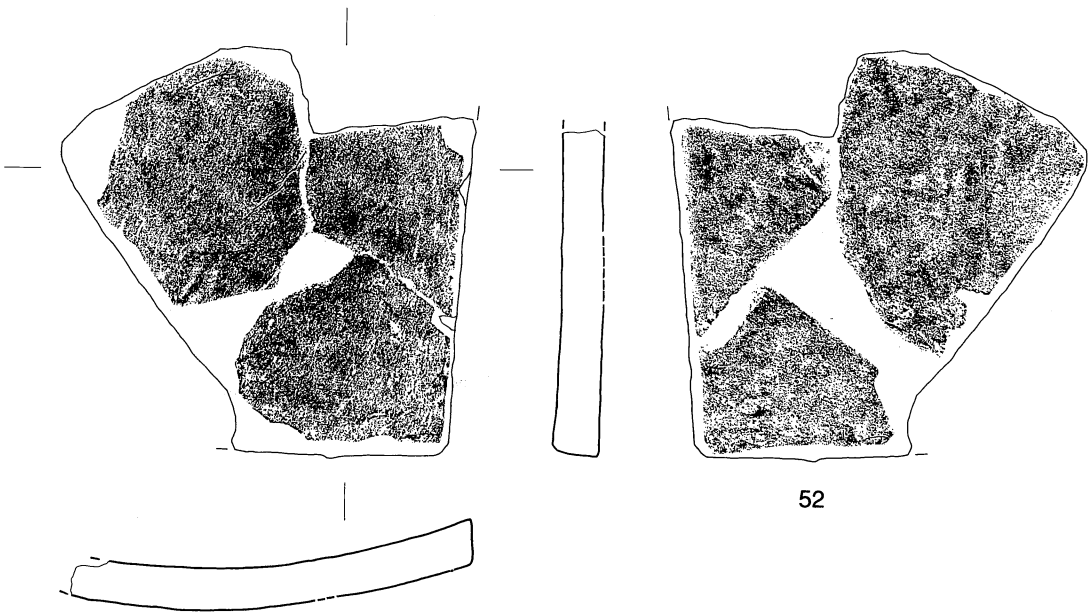
遺物は表土およびa上面より出土している。小破片化したものが多い（第7・8図）。

14～16は白磁碗・皿の口縁部。17は磁器（染付か）の菊花皿。底部はいわゆる碁笥底となる。底部外面は露胎となる。18はトルコブルーを呈する陶器の合子の蓋。19～24は青磁の碗。20は鎬蓮弁文を施す。22も蓮弁文が認められる。高台内部は露胎となる。23は白味がかった発色となっている。25・26は皿。27～33は染付碗。29は外面に牡丹唐草文を描く。32は完形に近い磁器碗である。発色が悪く、文様は不明瞭となっている。34は褐色を呈する陶器碗。35・36および40・41は陶器質の摺鉢。37は陶器甕の底部。38・39は土錘である。それぞれ5.6g、4.6g。

42～48はヘラ切りの土師器杯。49～52は近世瓦の破片。



51



52

0 10m

第9図　郭 2 出 土 遺 物 （3） (1／3)

(2) Ⅱ期面（第11～13図）

ＡトレンチおよびＣトレンチにて検出された石組み列は、下手（東）側に向かって弧状に配されるもので（第６図右）、10～50cm大の角の取れた円礫を一列に並べる。赤化した礫も認められる。特に、Ｃトレンチでは整然と並んでいる様子がうかがえる。

これらは切岸の端部近くに並べられた石組みと考えられ、第10図では多くの礫が「浮いた」状態で見られること、さらに図示した以外にも小さな礫が落ち込んだような形で見られたことなどから、元来、数段に組まれていた可能性もある。加えて現状では不明瞭となっているが、この石組み列背後の土塁状の土層も崩落したものと考えられる。ｆとｈは同質の土であり、間にはさまるｇには炭化物が多く含まれる。

Ｂトレンチでは石組み列は見られないが、空堀状の１の落ち込みや土塁状のｆの堆積などが認められる。

Ⅱ期に属する遺物は、第15・16図に示している。出土層ごとに簡略に記していく。

76～84はｈ出土。76は青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施す。77は青磁皿。外面下半部は無釉となる。78・79はいずれも青磁碗。78は外面に幅広い鈍い蓮弁文を施す。79は黄色味がかった発色をしている。80は白磁の皿。81は龍泉窯系の青磁にしばしば認められる、器壁のぶ厚い碗の底部で、やや黄色味がかった緑色を呈している。やや不明瞭であるが、内底見込み部にスタンプ文が認められる。高台畳付部より内面は無釉。82は陶器質のもので、内面に緑色の釉が認められるが、小破片のため、器種等は不明。83は備前系陶器の摺鉢。口縁部付近で、断面が三角形に近い形状となる。84は土師器の小皿。底部はヘラ切り。ｆ・ｈからは多量の土師器が出土しているが、ほとんどは小破片と化していた。また、器種の判明する個体を見るとほとんどは杯のようであり、83のような小皿は希少例であった。

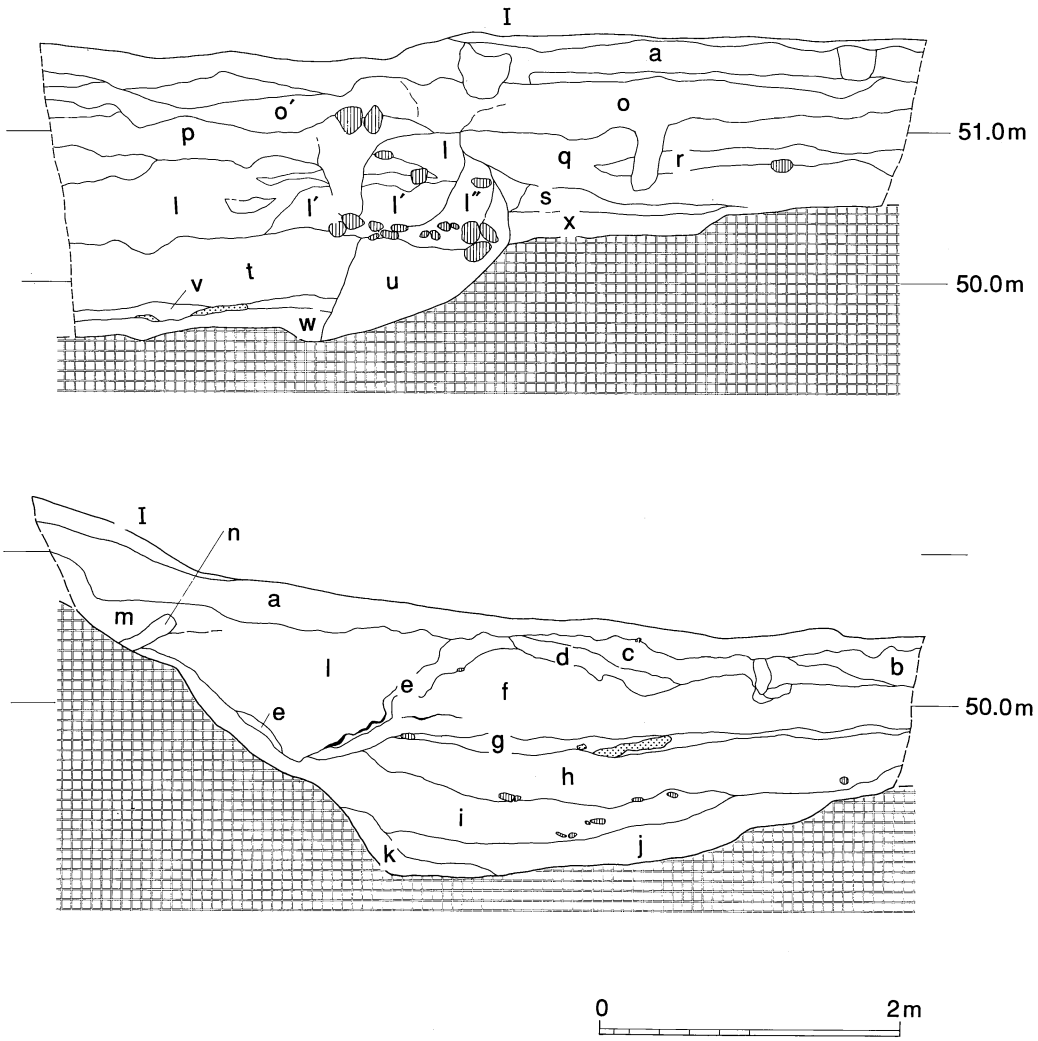
85～89はｑより出土。85～87は青磁の碗。88は土師器杯の底部。ヘラ切りである。89は国産の中世陶器の甕の底部から胴下半部。器面は赤褐色を呈しており、部分的にオリーブ色の自然釉の付着が認められる。この89のみ、図面は1/4縮小。

90・91はｆ出土の土錘。

92～98は１の最下部（ｔとの層界付近）より出土。92・93は青磁碗。94は染付碗。内面見込みは輪状に釉が剝ぎとられる。高台底部に砂目が残る。95～98は土師器の杯である。すべて底部はヘラ切りである。

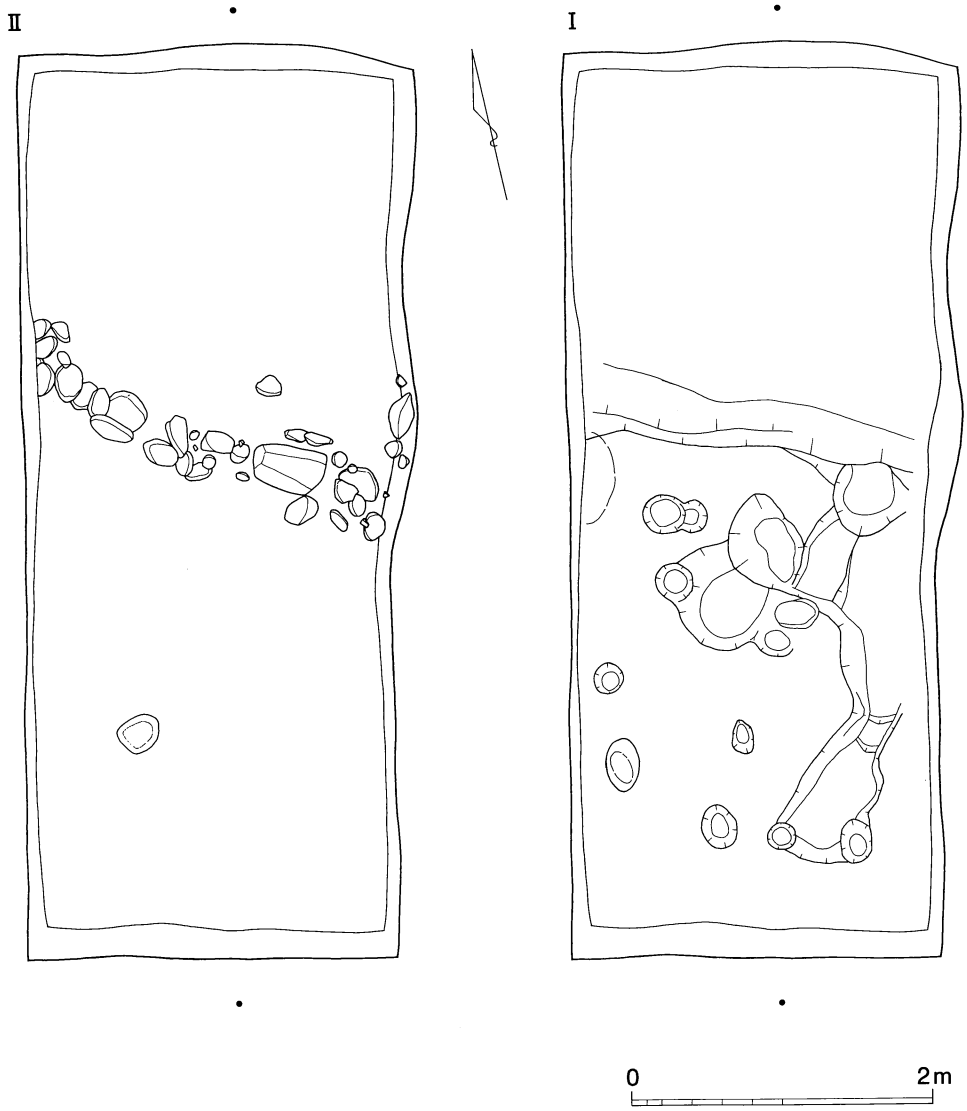
99～105はｐより出土。99は白磁の皿で、外面下部は露胎となる。100は染付碗。101は染付皿で、外面に蕉葉文を描く。102～105は土師器の杯。うち、103は底部が分厚く、体部の立ち上がり部との間に段を形成する。102のみは口縁部を除いて残存状況が良いが、その他は細片化したものが多く、焼成の関係からか、割れ口も磨滅したような状況を呈している。

106・107はｏより出土。106は青磁碗。無文。107は稜花皿で、内面に劃花文を描いている。以上、Ⅱ期面およびその上部から出土した資料を紹介したが、全体とした出土遺物は多種・多量に上り、そのために取り上げに若干の混乱が生じ、所属層の不明瞭となった資料も多くなってしまった。



a．2.5Y4／3（オリーブ褐）草木・樹根を含む。　b．2.5Y4／2（暗灰黄）礫を多く含む。
c．bと似るがやや黒味強い。　d．2.5Y5／4（黄褐）礫とわずかな粘質土より成る。lに似る。
e．2.5Y4／1（黄灰）fに似るがやや黒味強い。
f．2.5Y3／2（黒褐）礫を多く含む。赤色の小礫も目立つ。炭化物含む。遺物を特に多く包含する。
g．fと似るが炭化物を多く含む。スクリーントーン部は特に集中し、黒色を呈する。
h．fと同質。　j．2.5Y3／2（黒褐）礫を含む。　k．jより黄色味強い。
l．2.5Y6／4（にぶい黄）基盤層礫の再堆積層見かけの色は基盤層と変わらない。
m．2.5Y5／3（黄褐）lと似るが黒味若干強い。　n．2.5Y4／2（暗灰黄）。　o．fと同質。
p．hに似るが黒味強い。　q．oより黒味若干強い。　r．qより礫が多い。
s．2.5Y4／3（オリーブ褐）。　t．jと同質。　u．2.5Y3／1（黒褐）炭化物多く含む。
v．2.5Y2／1（黒）まだら、炭化物多く含む。　w．x．　jと同質。

第10図　A．Bトレンチ車壁層位図（1／50）



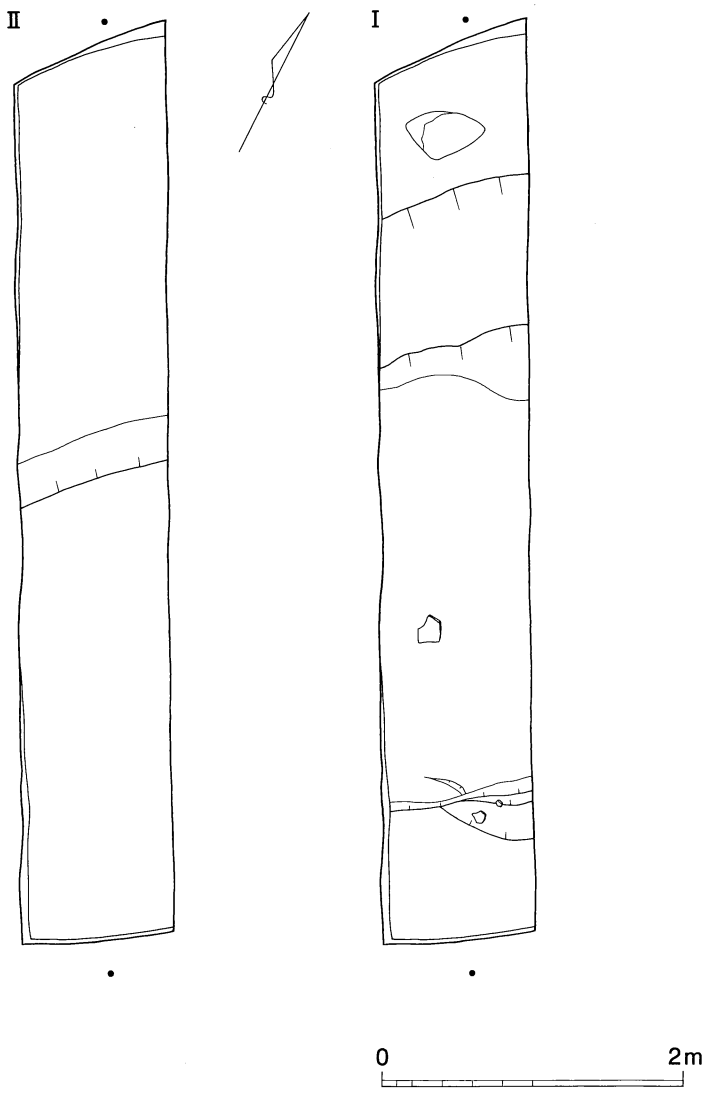
第11図　Ａトレンチ下層面の状況（1／50）

(3)　Ⅰ期面（第11～13図）

Ⅰ期には、基盤層に掘り込む形で段落ち状の遺構（Ａ・Ｃトレンチ）や小穴（Ａトレンチ）、溝あるいは通路状遺構（Ｂトレンチ）などが構築されている。Ａトレンチ段落ち状部分の位置はⅡ期の石組み列とほぼ同じである。層位断面を観察すると、Ⅰ期の段落ちの肩部より10～20cm上位にⅡ期の石組みが置かれている。このことから、ｕなどを埋め戻し土と考えれば、Ⅱ期の遺構は、Ⅰ期の段落ちの位置を踏襲して「改築」あるいは「改造」されたものとすることができよう。

Ｂトレンチでは溝状に掘り込まれた最下面に、硬化した部分があり、あるいは通路として機能したのかもしれない。

Ⅰ期の時期は、ｊなどの層から出土した遺物の年代によって示される。



第12図　Ｂトレンチ下層面の状況（1／50）

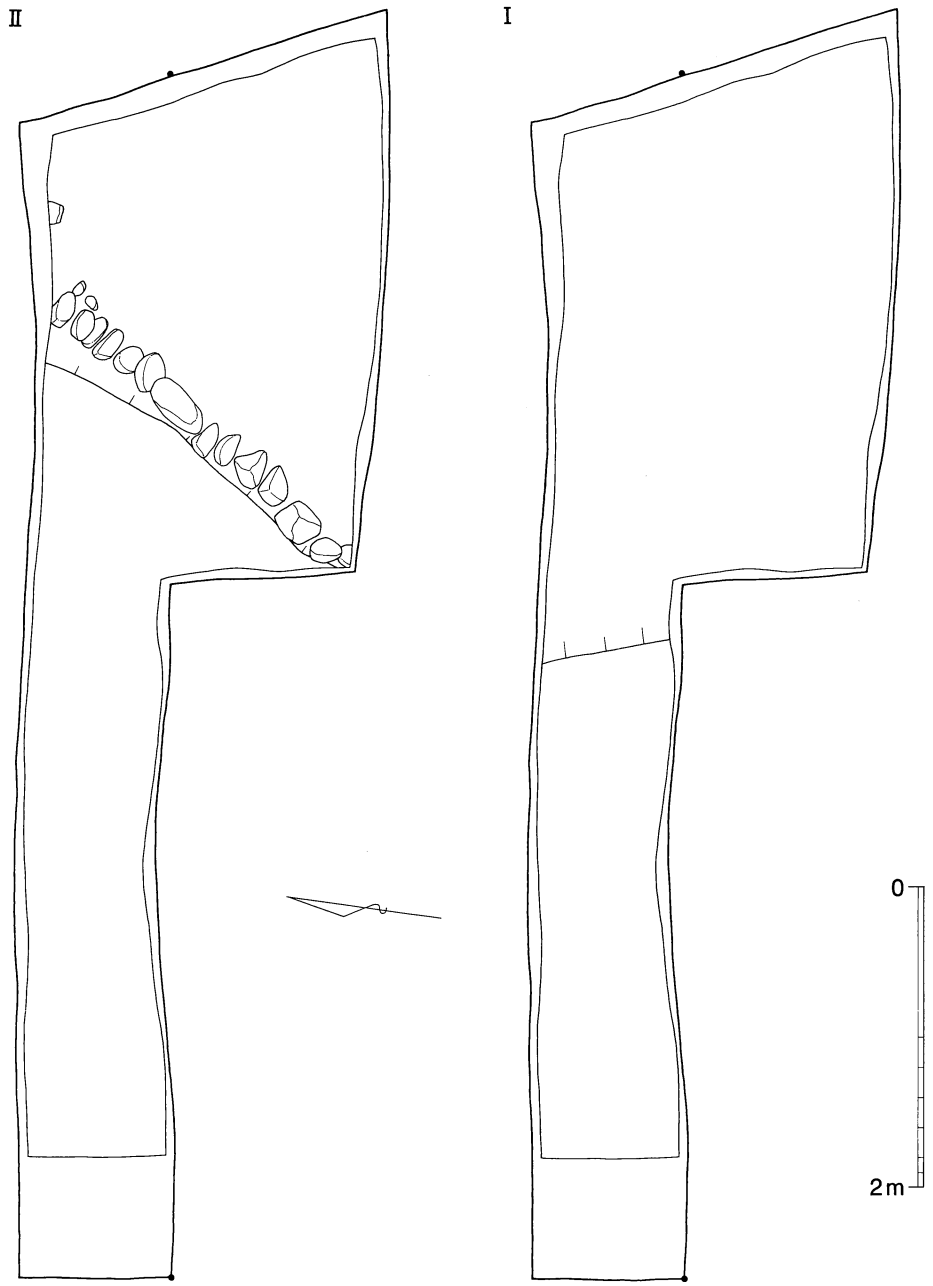
第14図に示した遺物はｊ出土のものである。

53は国産の陶器。全体に貫入が見られる。54・55は青磁碗。54は外面の口縁下部に沈線を入れる。56～70は土師器の杯である。ｆやｈ同様、出土量は多かったが、やはり小破片化したものが多く、図化可能な個体の割合は著しく低い。

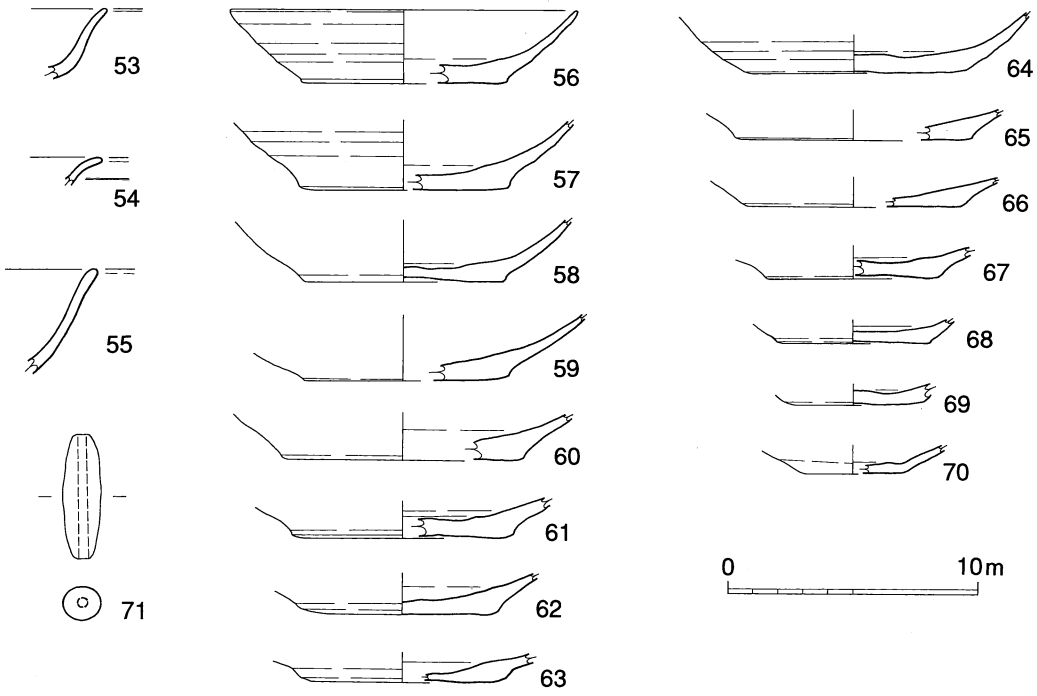
56～69は底部ヘラ切りで、色調も概ね黄褐色～橙褐色となる。口縁部から底部まで完全に遺存する個体は56くらいであるため全形は捉え難いが、体部はやや内弯気味となり、底部の端がわずかに外側に張り出すようである。

70のみは灰褐色を呈し、焼成も堅緻である。また底部は糸切りである。

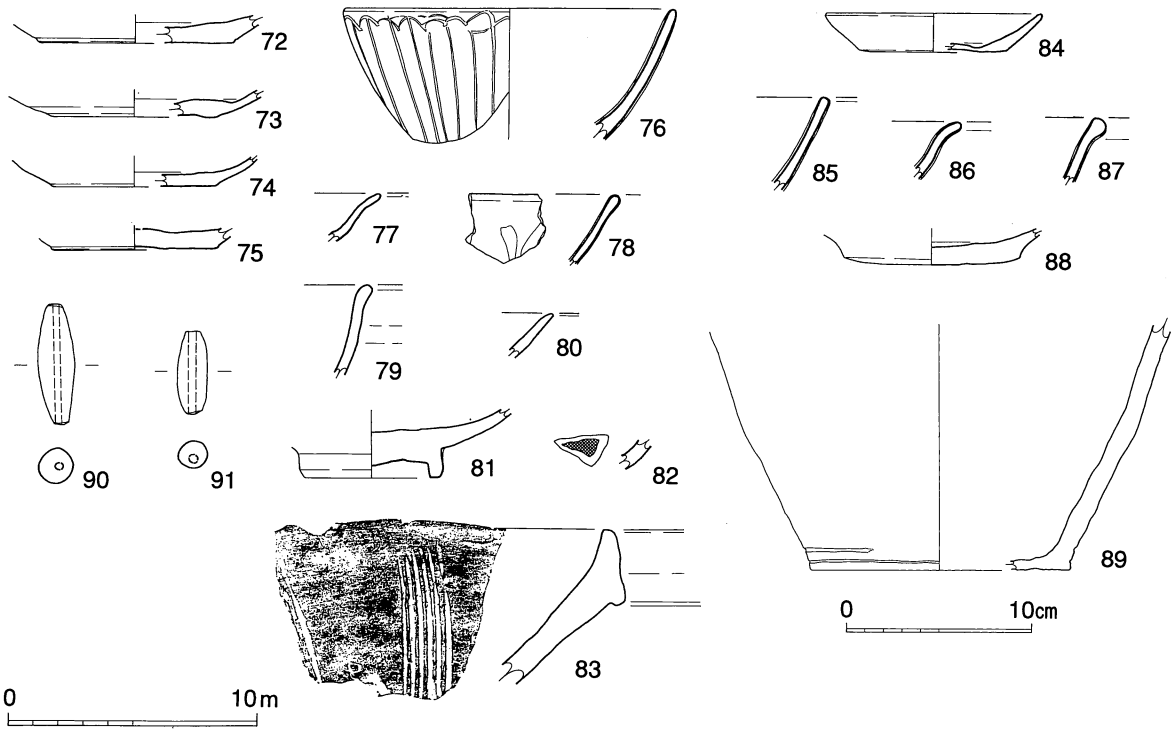
第15図の72～75はｉ出土の土師器杯。これらは全て底部ヘラ切りで、特徴は56～69の一群に近い。



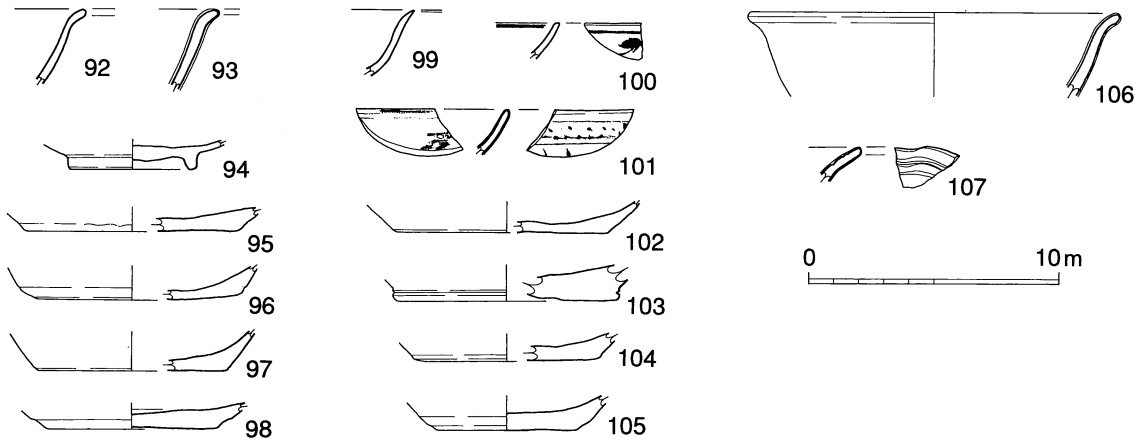
第13図　Ｃトレンチ下層面の状況（1／50）



第14図　郭２下層出土遺物（１）（1／3）



第15図　郭２下層出土遺物（２）（1／3・1／4）



第16図　郭２下層出土遺物（３）（1／3）

３．郭３

標高34m前後の、上段と下段の間にあるとりわけ狭い平坦地である。調査対象となり、調査区を設定したのはその北東端の箇所である。

掘り下げの結果、山手（西）側では、表土下は基盤層となっていたが、下手（東）側では崩落土が厚く堆積しており、間に黒色土層も挟まっていた。しかしながら、そこからは遺物はほとんど出土しておらず、人為的な造成によるものかどうかは不明である。

遺物は表土中を中心に出土している。面積の割には比較的多量に上った。白磁、青磁、染付、国産陶器、土錘などが見られる。

108・109は白磁の碗。108はやや灰色味を帯びる。110は青磁碗で、外面に線描きの蓮弁文を施す。111～126は染付である。113は外面に牡丹唐草文を施す碗である。115は肥前系の小碗か。122は皿で、ややくすんだ発色となっている。124は盤である。126は四方襷文を描く皿。

127は国産（古瀬戸か）陶器皿。128は焼成不良で判別し難いが、磁器（染付か）碗と見られる。内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。129は徳利形を呈する三彩である。産地は不明。130は陶器で、器種を含めて詳細な系譜は不明。上下も疑わしい。内面の文様は褐釉によるもの。

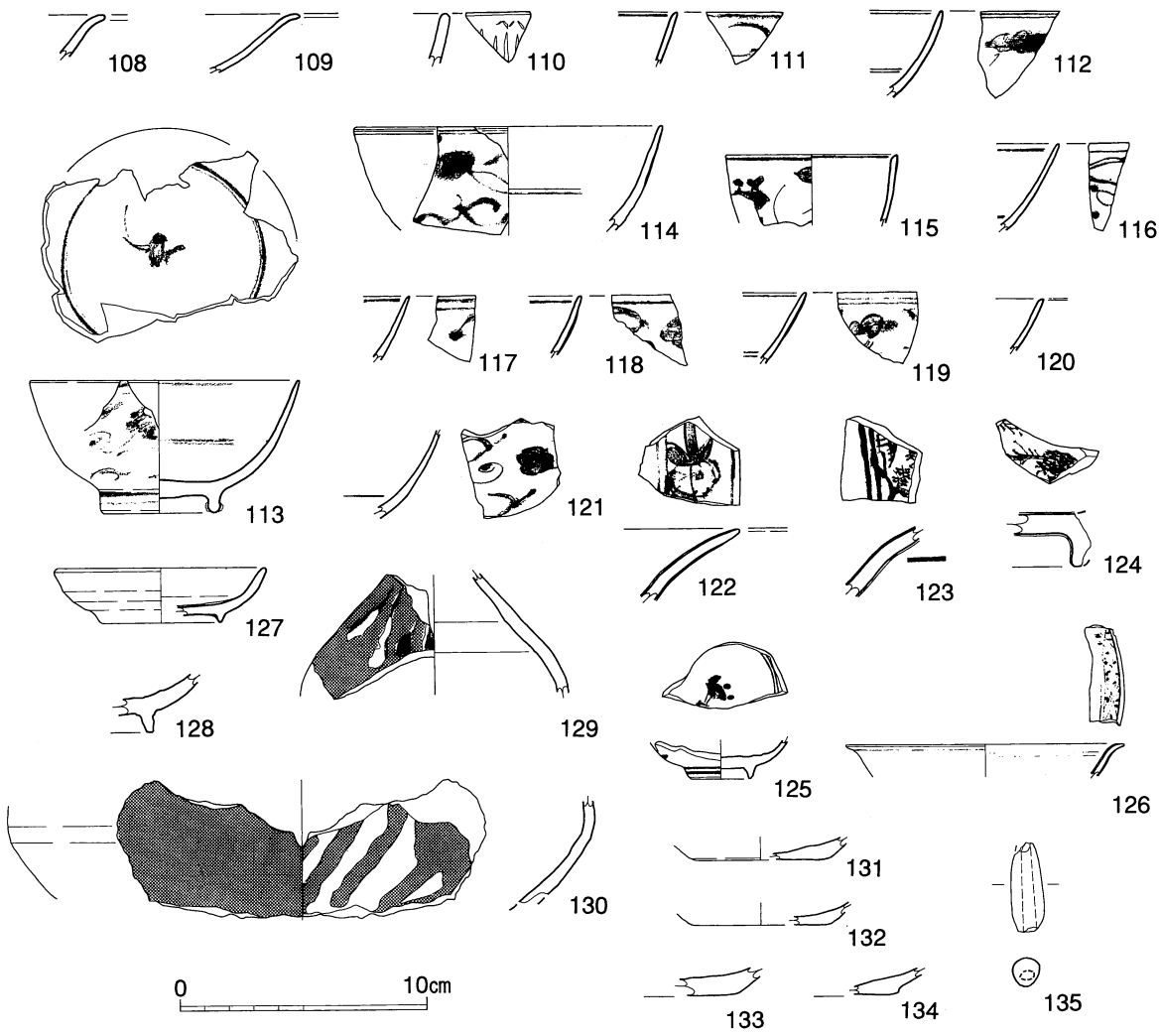
131～134は土師器の杯。いずれも小破片である。135は土錘。重量4.3ｇ。今回の調査ではこの種の土錘が比較的多く出土している。

４．郭４

下段の（今回の調査対象地では）最も南側に設定した調査区である。この平坦地自体はさらに南側へ続いていく。標高は約23m。

この地点は急崖の直下にあたり、特に倒れかかっている巨木があったため、調査区はかなり限定されたものとなった。

基盤面を追いかけると、下手（東）側に向かって傾斜していく様子がうかがえた。また基盤面で、溝らしき遺構（深さ15cm程度で、下手側に向かって注ぐ形となる）が検出されたが、時期、性格等は不明である。



第17図　郭　3　出　土　遺　物　(1／3)

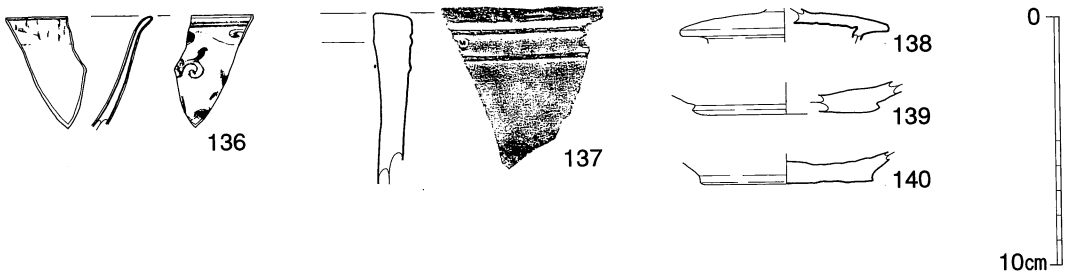
遺物は表土中から若干量出土している。

136は染付碗で、外面に牡丹唐草文を施す。137はにぶい赤褐色を呈する瓦質の火鉢。雲形（？）のスタンプ文を付す。138は赤褐色の器肉の在地陶器の蓋である。139・140は土師器の杯。いずれも底面が外方に張り出す形態のもの。

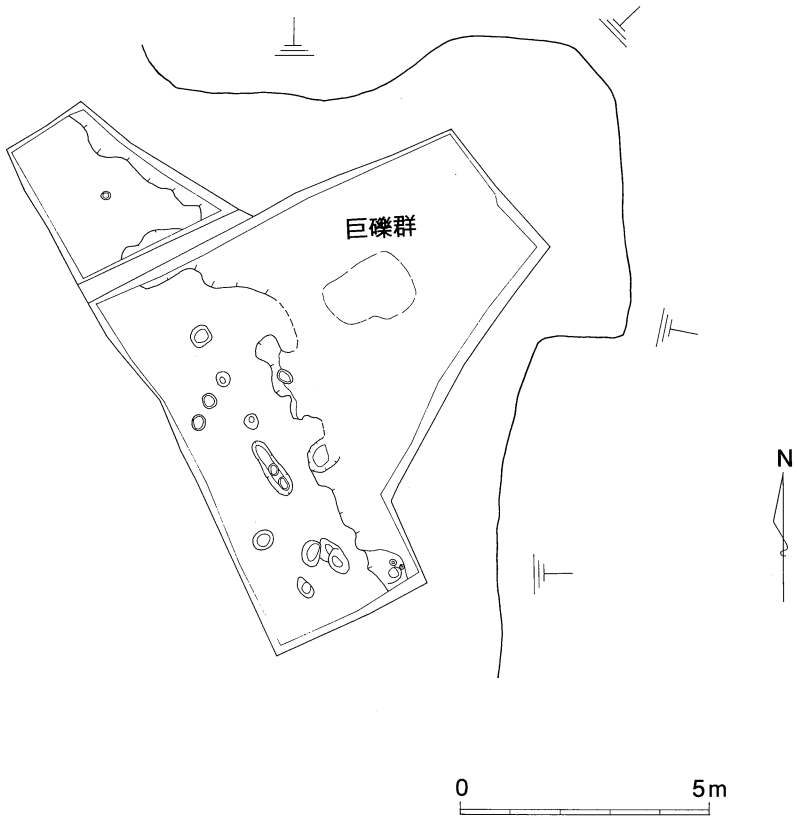
5．郭5（第19図）

郭4の北西側に位置する。郭4と標高はほぼ同じであるが、間には谷が入っており、両者は独立したものとなっている。

遺構としては、基盤層上面でほぼ一列に並ぶピットが検出されており、その下手（北東）側は、基盤層は傾斜を成して下っていく。その部分の表土中に、巨礫の集中する箇所があるが、人為的なものではなく、上手側から流れ込んだものか。



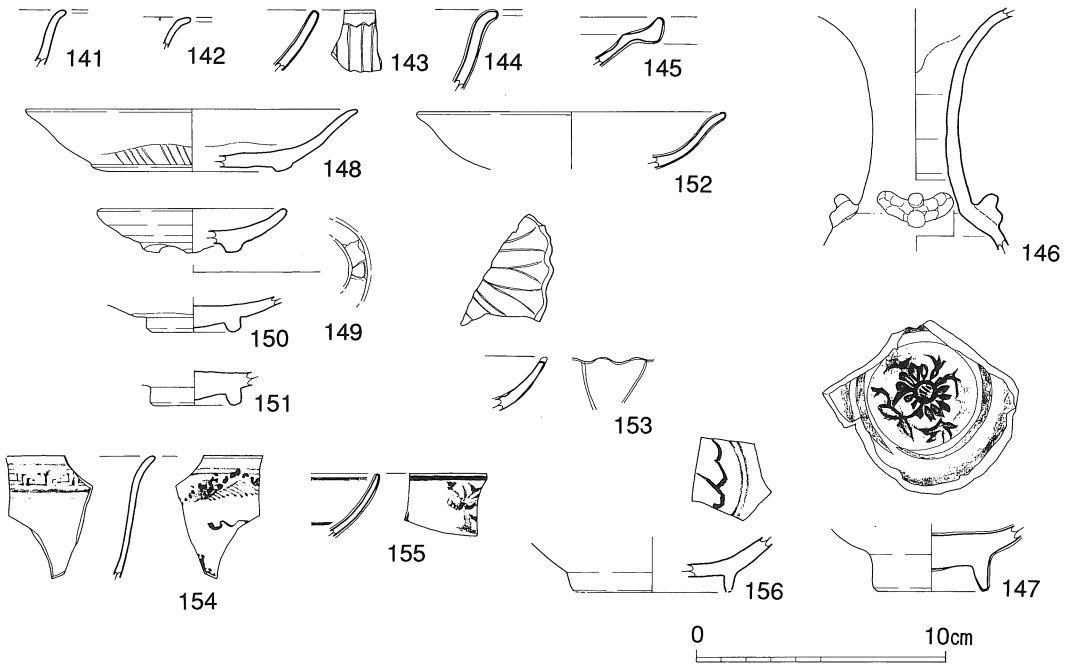
第18図　郭　4　出　土　遺　物　(1／3)



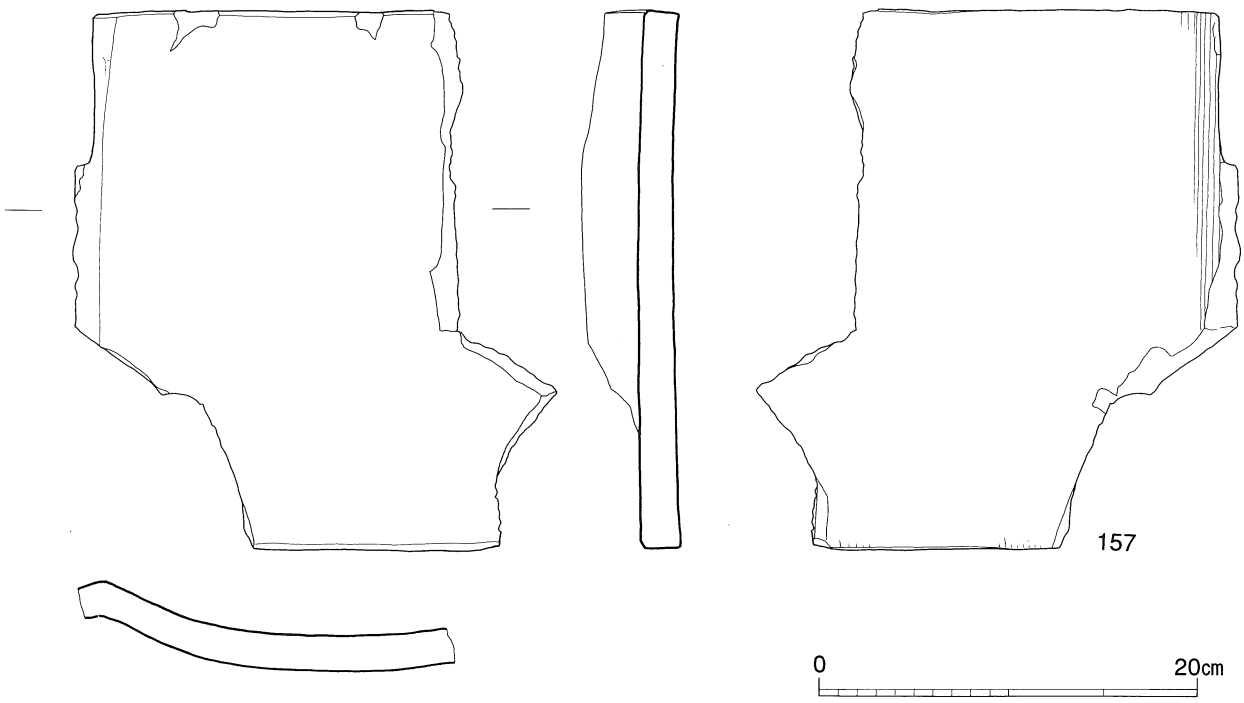
第19図　郭　5　の　状　況　(1／150)

遺物は第20図に掲載している。

141・142は白磁の碗、皿。143・144は青磁碗で、143は外面に線描きの蓮弁文を施す。145は龍泉窯系青磁の杯形のもの。口縁部が鋭く外反する。146は青磁の瓶。頸部と胴部の境に突起を付ける。147は龍泉窯系青磁の碗の底部。内底見込みに花文様をスタンプする。高台内部は中心部を除いて露胎。



第19図　郭　5　出　土　遺　物（1）（1／3）



第20図　郭　5　出　土　遺　物（2）（1／4）

148～153は白磁。148は低い削り出だしの高台を持つ皿。体部中程までしか釉がかからない。149は切り高台の小皿底部で、全面に施釉する。150は碗の底部。体部の下部より下位は露胎となる。151も同様の底部。152は皿の口縁部。やや黄灰色がかった発色となる。153は白磁の菊花皿か。やや青味がかる。外面には線彫り、内面はヘラ彫りで花弁を描く。

154～156は染付。154は碗で、外面に山文、内面に雷文を描く。155も碗である。外面文様は草文か。156は皿である。

157は灰色を呈する平瓦。背、谷の両面ともナデ調整であるが、背には一部、ケズリの跡がみられる。

6．郭6

調査対象地内では最も北側に位置する小さな平坦面。標高は下段の郭4や郭5とほぼ同じである。全体に、上手側からの崩落土と見られる粘土が厚く堆積しており、その中から少量の遺物が出土しているが、明瞭な遺構は認められなかった。

第Ⅲ章　ま　と　め

宮崎県内においては数の少ない近世城郭である高鍋城の、北東側の一角を対象とした今回の調査では、狭い範囲ながら近世以前の姿を捉えることができ、その点は大きな成果とすることができよう。しかしながら、見通しの甘さゆえ下層の調査が一部分にとどまったことについては深い反省の念を抱いている。限られた紙幅であり、また遺物に関する解析力不足もあるが、下層の調査を中心に考察し、わずかなりとも「古高鍋城」の在り方に迫り、罪滅ぼしとしたい。

さて、下層の遺構に関しては、Ⅰ期面、Ⅱ期面と称した2つの構築面が認められ、Ⅰ期では段落ち状遺構、小穴、通路状遺構が、Ⅱ期では石組み列や（不明瞭ながら）土塁状遺構が築かれていたことは既に述べた通りである。段落ち状遺構は下手（東）側に対する防御のための施設と考えられ、また速断はできないが、石組み列は防御の意図に加えて、土塁の端部の土止め的な役割も果たしたものと推測される[1)]。

また、Ⅱ期の土塁状遺構としたｆ、ｈの間層として、炭化物を含む層（ｇ）が認められるが、ｆとｈの土質が同じであることから、それらが時期差を有するとは考え難く、ｇは土塁構築の作業工程中に生じた一時的な地表面と考えておきたい。

それぞれの「期」の遺物について見てみると、Ⅰ期、Ⅱ期ともにほぼ同時期の陶磁器類や同様の特徴を有する土師器が見られるなど、大きな時期差はないものと推測される。Ⅰ期の段落ち状遺構の位置がⅡ期の石組み列においても踏襲されることは、それを裏付ける事実と言えよう。あるいは中世末期の城館においてしばしば見受けられる、領有者の交替に伴う改築とも考えられたが、2つの「期」に大きな時期差がないという今回の仮定が正しいとすれば、成り立たないことになる。

そうした場合の下層層準期の年代は、蓮弁文を施す青磁や備前系の摺鉢などの陶磁器の年代から見て、概ね、大きくは16世紀代に位置づけられよう。高鍋城（当時は財部城）は戦国期の天正5（1577）年に、

表 1

No.	種　別	器　種	出土地点	法　量 (cm)			色　調		備　考
				口　径	底　径	器　高	釉　色	素　地	
1	白　磁	皿	郭　1	(15.6)	(5.85)	2.58	灰　白	灰　白	目跡・韓国産
2	陶　器	摺　鉢	〃	–	(9.65)	–	にぶい赤褐	赤　褐	備前系
3	染　付	小　碗	〃	–	(2.8)	–	明青灰	灰　白	
4	染　付	皿	〃	–	(8.3)	–	灰　白	灰　白	中国産
5	染　付	皿	〃	–	–	–	灰　白	灰　白	
6	染　付	皿	〃	–	–	–	灰　白	褐　灰	
7	染　付	皿	〃	(19.6)	–	–	灰　白	褐　灰	
8	染　付	皿	〃	(13.0)	–	–	灰　白	褐灰・にぶい赤褐	
9	土師器	杯	〃	–	(6.5)	–	橙	橙	
14	白　磁	碗	郭　2	–	–	–	灰　白	灰　白	
15	白　磁	小　碗	〃	(9.0)	–	–	灰　白	灰　白	
16	白　磁	皿	〃	–	–	–	灰　白	淡　黄	
17	染付？	稜花盃	〃	(6.3)	(2.7)	(1.7)	灰　白	灰　白	
18	陶　器	蓋	〃	–	–	–	トルコブルー	灰　黄	産地？
19	青　磁	碗	〃	(13.0)	–	–	灰オリーブ	灰　黄	
20	青　磁	碗	〃	(9.7)	–	–	明オリーブ灰	灰　白	
21	青　磁	碗	〃	–	–	–	暗灰黄	灰　黄	
22	青　磁	碗	〃	–	(4.25)	–	にぶい黄褐	にぶい褐	
23	青　磁	小　碗	〃	–	(4.7)	–	灰　白	灰白・橙	
24	青　磁	小　碗	〃	–	(3.8)	–	灰	灰・にぶい褐	
25	青　磁	皿	〃	–	–	–	緑　灰	灰　褐	
26	青　磁	皿？	〃	–	–	–	灰オリーブ	灰　黄	
27	染　付	碗	〃	–	–	–	明青灰	淡　黄	
28	染　付	碗	〃	–	–	–	明青灰	灰　白	
29	染　付	碗	〃	–	–	–	明青灰	灰　白	中国産か。
30	染　付	碗	〃	–	–	–	明青灰	灰　白	
31	染　付	碗	〃	–	–	–	明青灰	灰　白	
32	染　付	碗	〃	(13.3)	(5.0)	(5.1)	浅　黄	にぶい黄橙	
33	染　付	碗	〃	–	–	–	灰　白	灰　黄	
34	陶　器	碗	〃	–	–	–	浅　黄	浅　黄	
35	陶　器	摺　鉢	〃	–	–	–	にぶい赤褐	にぶい赤褐・褐灰	備前系

表 2

No.	種別	器種	出土地点	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調 釉色	素地	備考
36	陶器	摺鉢	郭 2	–	–	–	にぶい赤褐	にぶい赤褐・褐灰	備前系
37	陶器	甕	〃	–	–	–	にぶい褐	灰	
40	陶器	摺鉢	〃	–	–	–	明赤褐	明赤褐・褐灰	備前系
41	陶器	摺鉢	〃	–	–	–	褐灰・暗褐	暗褐・褐	備前系
42	土師器	杯	〃	–	(7.6)	–	–	にぶい橙	
43	土師器	杯	〃	–	(7.6)	–	–	橙	
44	土師器	杯	〃	–	(7.5)	–	–	橙	
45	土師器	杯	〃	–	(7.6)	–	–	にぶい橙	
46	土師器	杯	〃	–	–	–	–	にぶい橙	
47	土師器	杯	〃	–	(7.6)	–	–	にぶい橙	
48	土師器	杯	〃	–	(8.6)	–	–	にぶい橙	
53	陶器	碗	郭 2 j	–	–	–	灰白	淡黄	
54	白磁	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
55	白磁	碗	〃	–	–	–	オリーブ灰	灰	
56	土師器	杯	〃	(14.0)	(8.3)	3.0	–	にぶい橙	
57	土師器	杯	〃	–	(8.4)	–	–	橙	
58	土師器	杯	〃	–	8.1	–	–	にぶい橙・浅黄橙	
59	土師器	杯	〃	–	8.2	–	–	橙	
60	土師器	杯	〃	–	(9.6)	–	–	にぶい橙・灰	
61	土師器	杯	〃	–	(8.9)	–	–	浅黄橙	
62	土師器	杯	〃	–	7.85	–	–	浅黄橙	
63	土師器	杯	〃	–	(8.2)	–	–	橙	
64	土師器	杯	〃	–	(8.8)	–	–	浅黄橙	
65	土師器	杯	〃	–	(9.5)	–	–	橙	
66	土師器	杯	〃	–	(8.5)	–	–	淡橙	
67	土師器	杯	〃	–	(7.0)	–	–	橙・浅黄橙	
68	土師器	杯	〃	–	6.1	–	–	橙	
69	土師器	杯	〃	–	5.7	–	–	にぶい橙・灰黄褐	
70	土師器	杯	〃	–	(4.2)	–	–	灰褐・灰白	底部糸切り

表 3

No.	種別	器種	出土地点	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調 釉色	素地	備考
72	土師器	杯	郭 2 i	–	(7.8)	–	–	浅黄橙	
73	土師器	杯	〃	–	(6.6)	–	–	にぶい橙	
74	土師器	杯	〃	–	(6.6)	–	–	浅黄橙	
75	土師器	杯	〃	–	(6.7)	–	–	浅黄橙	
76	青磁	碗	郭 2 h	(13.2)	–	–	オリーブ灰	灰白	
77	青磁	皿	〃	–	–	–	灰オリーブ	灰白	
78	青磁	碗	〃	–	–	–	浅黄	灰白	
79	青磁	碗	〃	–	–	–	浅黄	灰白	
80	白磁	碗	〃	(14.4)	–	–	灰白	灰白	
81	青磁	碗	〃	–	5.4	–	灰	灰白	内面スタンプ文
82	陶器	不明	〃	–	–	–	灰オリーブ	にぶい橙	内面緑色釉
83	陶器	摺鉢	〃	–	(22.1)	–	灰	灰	備前系
84	土師器	皿	〃	(8.2)	(5.5)	1.6	–	橙·にぶい橙	
85	青磁	碗	郭 2 q	–	–	–	灰オリーブ	灰白	
86	青磁	碗	〃	–	–	–	灰オリーブ	灰白	
87	青磁	碗	〃	–	–	–	灰オリーブ	灰白	
88	土師器	杯	〃	–	(7.1)	–	–	浅黄橙	
89	陶器	甕	〃	–	(14.2)	–	灰オリーブ·黒褐	褐灰	国産中世陶器
92	青磁	碗	郭 2 l	–	–	–	明緑灰	灰白	
93	青磁	碗	〃	–	–	–	緑灰	灰白	
94	染付	碗	〃	–	5.15	–	浅黄	浅黄橙	焼成不良
95	土師器	杯	〃	–	(8.4)	–	–	橙·浅黄橙	
96	土師器	杯	〃	–	(8.6)	–	–	にぶい橙	
97	土師器	杯	〃	–	(7.6)	–	–	浅黄橙	
98	土師器	杯	〃	–	(6.9)	–	–	浅黄橙	
99	白磁	碗	郭 2 p	(14.4)	–	–	灰白	灰白	
100	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
101	染付	皿	〃	–	–	–	明青灰	灰白	中国産
102	土師器	杯	〃	–	8.0	–	–	にぶい橙	
103	土師器	杯	〃	–	(9.0)	–	–	橙	
104	土師器	杯	〃	–	(7.4)	–	–	にぶい橙·橙	
105	土師器	杯	〃	–	(5.6)	–	–	にぶい橙	

表 4

No.	種別	器種	出土地点	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調 釉色	素地	備考
106	青磁	碗	郭 2 o	(14.4)	–	–	オリーブ灰	灰白	
107	青磁	稜花皿	〃	–	–	–	明緑灰	灰白	
108	白磁	碗	郭 3	–	–	–	灰白	灰白	
109	白磁	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
110	青磁	碗	〃	–	–	–	灰オリーブ	灰黄	
111	染付	碗	〃	(8.6)	–	–	灰白	灰白	
112	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
113	染付	碗	〃	–	4.6	–	灰白	灰白	
114	染付	碗	〃	–	(12.4)	–	灰白	灰白	
115	染付	小碗	〃	(7.0)	–	–	明青灰	灰白	肥前系
116	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
117	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
118	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
119	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
120	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
121	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
122	染付	皿	〃	–	–	–	灰白	灰白	
123	染付	皿	〃	–	–	–	灰白	灰黄	
124	染付	盤	〃	–	–	–	灰白	灰黄	
125	染付	小碗	〃	–	–	–	灰白	淡黄	
126	染付	皿	〃	(11.25)	–	–	灰白	灰白	
127	青磁	皿	〃	(8.3)	(4.8)	2.25	浅黄	灰黄	
128	染付？	碗	〃	–	(4.8)	–	灰白	浅黄	焼成不良
129	三彩陶	徳利	〃	–	–	–	緑·黄·褐	浅黄	
130	陶器	不明	〃	–	–	–	黄褐	灰黄	中国産？
131	土師器	杯	〃	–	(5.7)	–	–	にぶい橙	
132	土師器	杯	〃	–	(5.6)	–	–	淡橙	
133	土師器	杯	〃	–	(8.0)	–	–	にぶい橙	
134	土師器	杯	〃	–	–	–	–	にぶい橙	
136	染付	碗	郭 4	–	–	–	明青灰	灰白	中国産
137	瓦器	火鉢	〃	–	–	–	にぶい赤褐	橙	
138	陶器	蓋	〃	–	–	–	にぶい黄橙	にぶい赤褐	
139	土師器	杯	〃	–	(7.5)	–	–	浅黄橙	
140	土師器	杯	〃	–	(7.0)	–	–	浅黄橙	

表 5

No.	種別	器種	出土地点	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調 釉色	素地	備考
141	白磁	碗	郭 5	–	–	–	灰白	灰白	
142	白磁	皿	〃	–	–	–	灰白	灰白	
143	青磁	碗	〃	–	–	–	灰オリーブ	灰褐	
144	青磁	碗	〃	(12.8)	–	–	オリーブ灰	灰白	
145	青磁	杯	〃	–	–	–	オリーブ灰	灰白	
146	青磁	瓶	〃	–	–	–	明オリーブ灰	灰白	
147	青磁	碗	〃	–	(4.2)	–	暗オリーブ	灰白	
148	白磁	皿	〃	(13.0)	(6.7)	(2.55)	灰白	灰白	切り高台
149	白磁	皿	〃	(7.2)	(2.2)	(1.8)	灰白	灰白	
150	白磁	碗	〃	–	(3.75)	–	灰白	浅黄橙	
151	白磁	碗	〃	–	–	–	灰白	灰白	
152	白磁	皿	〃	(12.0)	–	–	灰白	にぶい黄橙	
153	白磁	皿	〃	–	–	–	灰白	灰白	
154	染付	碗	〃	–	–	–	灰白	淡黄	
155	染付	皿	〃	–	–	–	明緑灰	淡黄	
156	染付	皿	〃	–	–	–	明オリーブ灰	灰白	

伊東氏の没落により島津氏へと領有が代わっており、Ⅰ期、Ⅱ期の変化がそれに対応するものかどうか(前述の通り遺物は否定的な見解を導き出しているようであるが)という点が大きな問題として残る[2)]。

土師器の杯については全形や法量の判明する個体は少ないものの、そのほとんどが底部ヘラ切りであり、口径は比較的大きく(56で14.0cm)、やや古相を示しているようにも感じられる。当地域の特徴であろうか。

近世の状況とについては不明な点が多い。上段の郭１、郭２などは造成の手が加えられて腰曲輪状の平坦地となったと考えられるが、顕在遺構は認められず、出土する瓦も散発的で、当地点に瓦葺きの建物があったと見るよりは、より高い位置の曲輪から破砕された瓦が流れ込んだと解釈すべきであろう。絵図にも、今回の調査地付近には何らの施設も描かれていない[3)]。また伝承によれば調査地の真下辺りに嶋田門があったとされるが、その位置や登城ルートについても不明となっている。そのような状況ではあるが、面積に比して多量とも言える遺物が出土している点はやはり注意せねばならず、近世に入っても何らかの形で機能が維持されていた可能性は残る。

尚、出土瓦に関しては、概ね慶長年間でも前半には遡らない見られ、秋月氏入封以後のものとするのが妥当か[4)]。

本章の冒頭では、この高鍋城について「近世城郭」と紹介した。しかしながらこれまで見てきたように(あるいは縄張り図からも指摘できる事であろうが)、中世城郭を近世の居城に改造した事例であり、日向においては佐土原城や飫肥城など諸小藩の居城に見られる在り方と言えよう。

(註)

1．土塁下部の土止めの石列については、いくつかの類例があるようである。

中井　均　「雪野山古墳の中世城郭遺構について」『雪野山古墳の研究　考察編』1996　雪野山古墳発掘調査団

日向においても、木城町・高城の主郭の調査で同様の石組み列が検出されている。同じ新納院に属する地の城郭での類例であり、注目される。

『高城跡　木城町文化財調査報告書』第４集　1994　木城町教育委員会

また、若干性格は異なるが、都城市・都之城主郭部や中之城の調査において、通路の側縁部に組まれた土止めのための石組みの報告例がある。

『都城市文化財調査報告書』第３集　1983　都城市教育委員会

「都之城本丸跡」『都城市文化財調査報告書』第10集　1989　同上

2．今回は、陶磁器類についての細かい生産年代の特定ができなかったため、結論は導き出せなかった。この問題については今後、何らかの形で再検討を行いたい。

3．高鍋町歴史総合資料館蔵の絵図による。

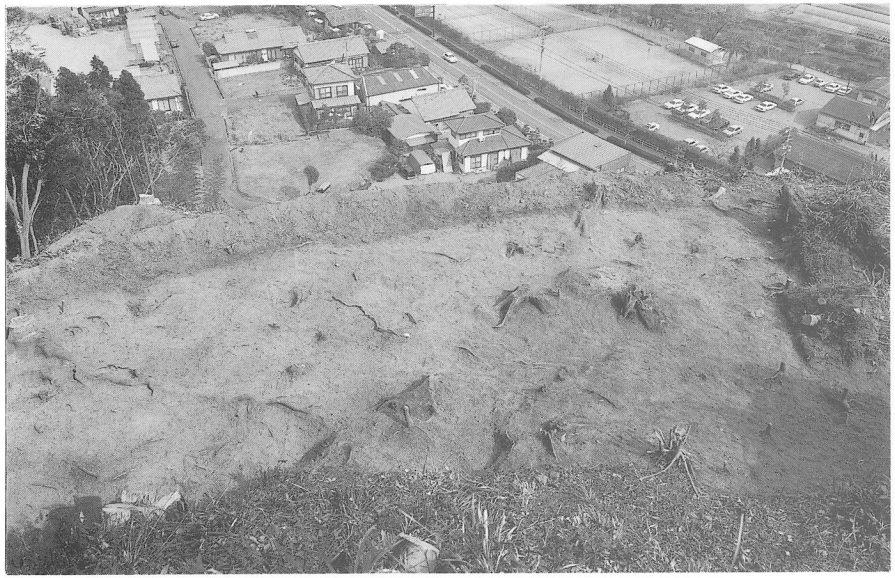
4．高鍋町教育委員会蔵の試掘調査による瓦資料の中に、コビキＡ類の丸瓦など、天正年間に遡りうるものがあるという。秋月氏入封以前に瓦葺きの建物があった可能性が生じてきた。

瓦の年代観につていは中井　均氏に御教示いただいた。

1．高鍋城跡全景（北東上空より）

2．三の丸方向を望む

3．郭２　調査前状況（南より）



4．郭１の状況（西より）

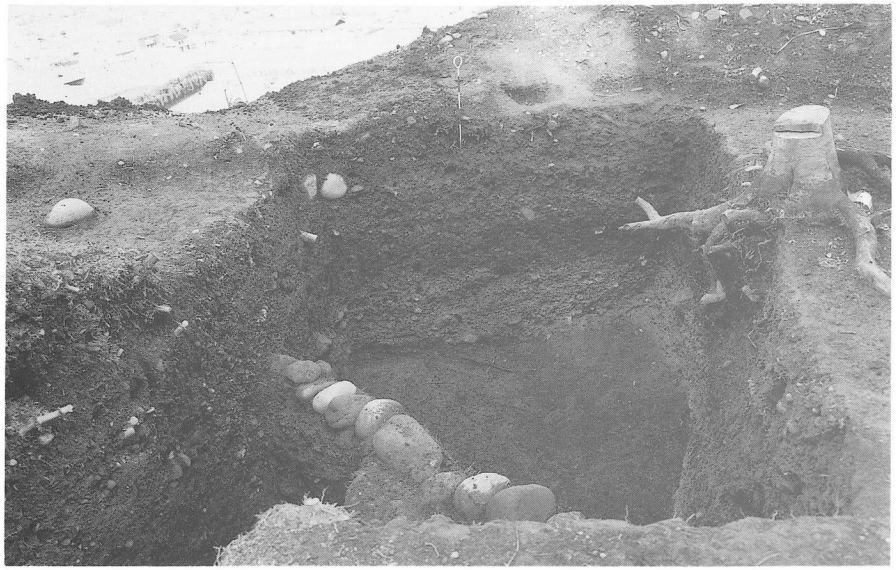
5．郭１の状況（南より）

6．郭１下トレンチ（南より）

7．郭２の状況（北西より）

8．Ａトレンチ東壁層位

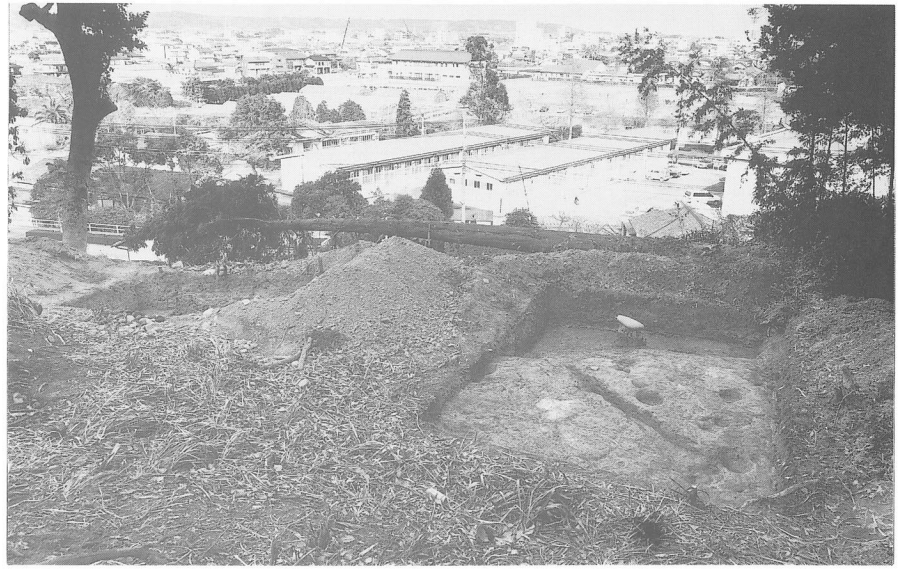
9．ＡトレンチⅡ期面（北より）



10.　Ｃトレンチ Ⅱ 期面石積み列（西より）

11.　Ａトレンチ Ⅰ 期面の状況（北より）

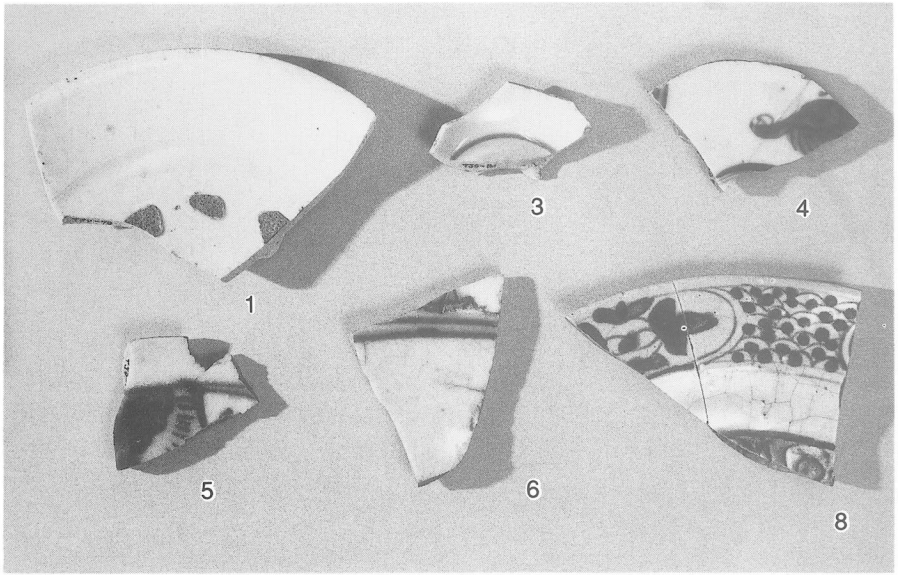
12.　郭 3 の状況（西より）



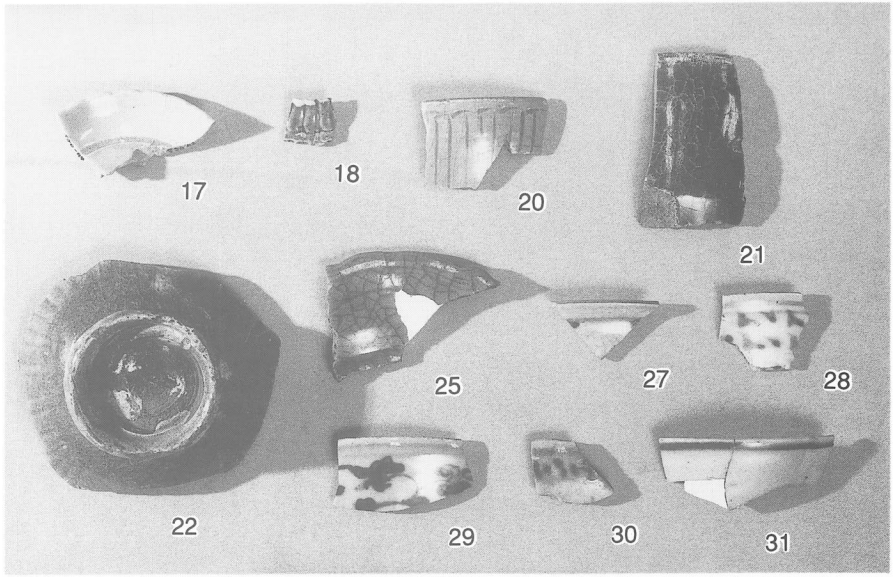
13.　郭 4 の状況（西より）

14. 郭５の状況（南西より）

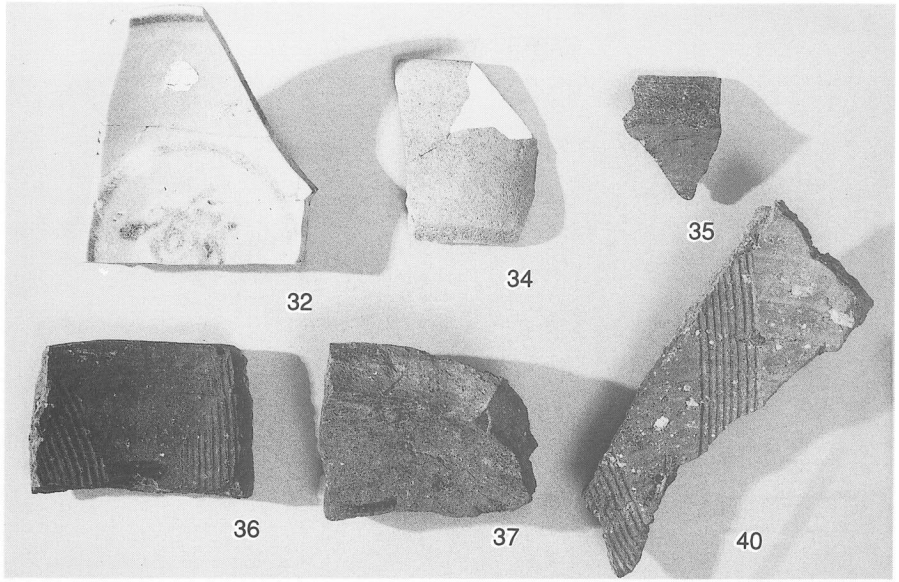
15. 郭５の状況（北西より）



16. 郭１　出土遺物

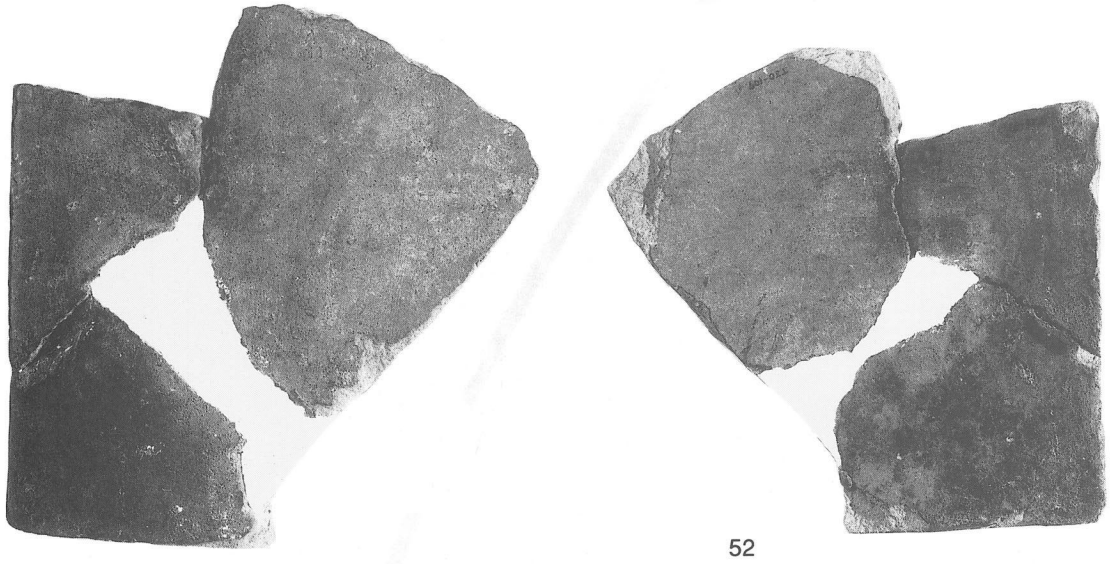


郭２　出土遺物（１）

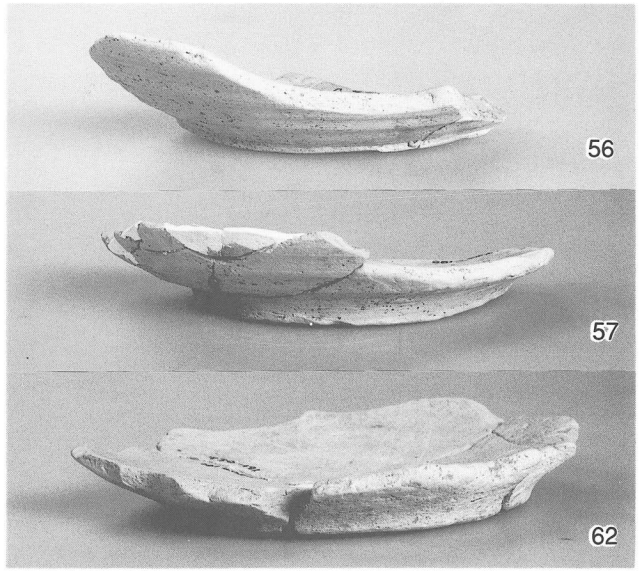


18. 郭２　出土遺物（２）

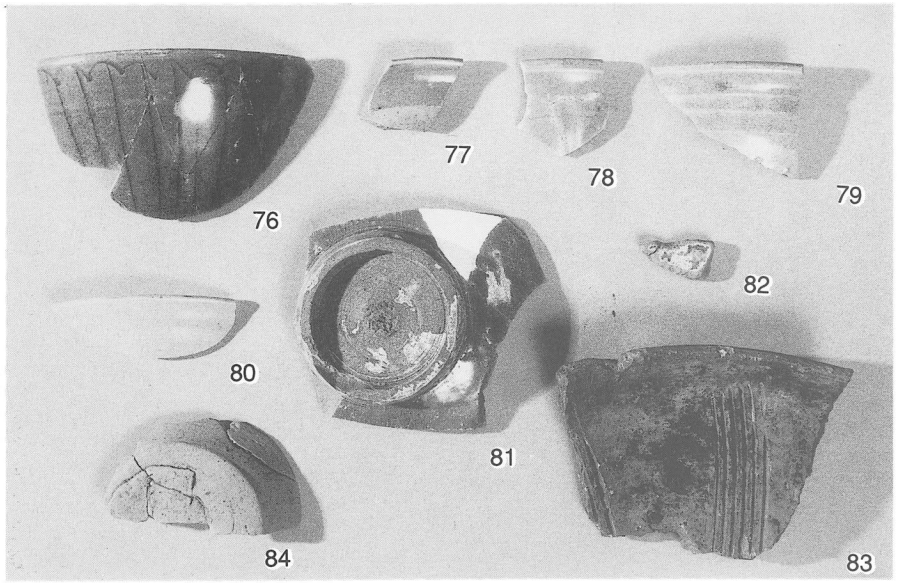
19. 郭２　出土遺物（３）



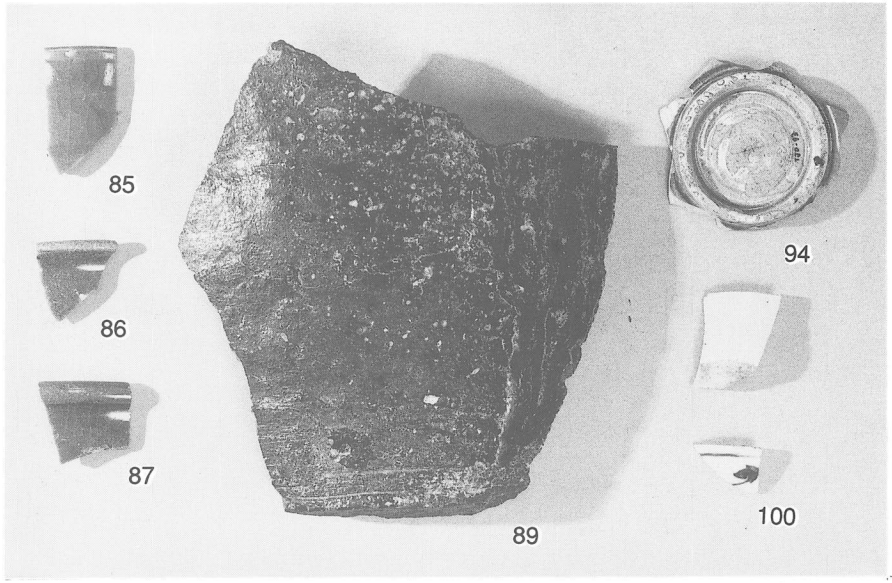
20. 郭２　出土遺物（４）



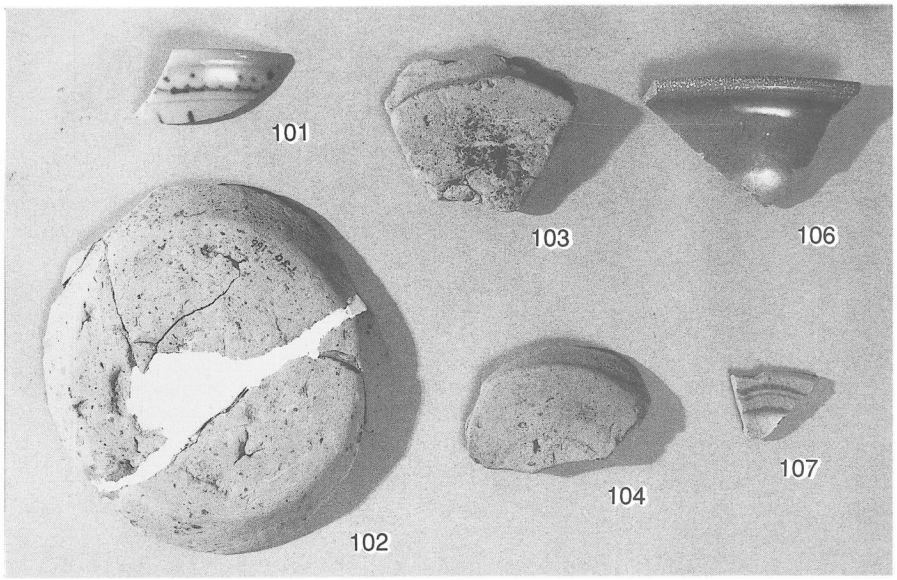
21. 郭２　下層出土遺物（１）



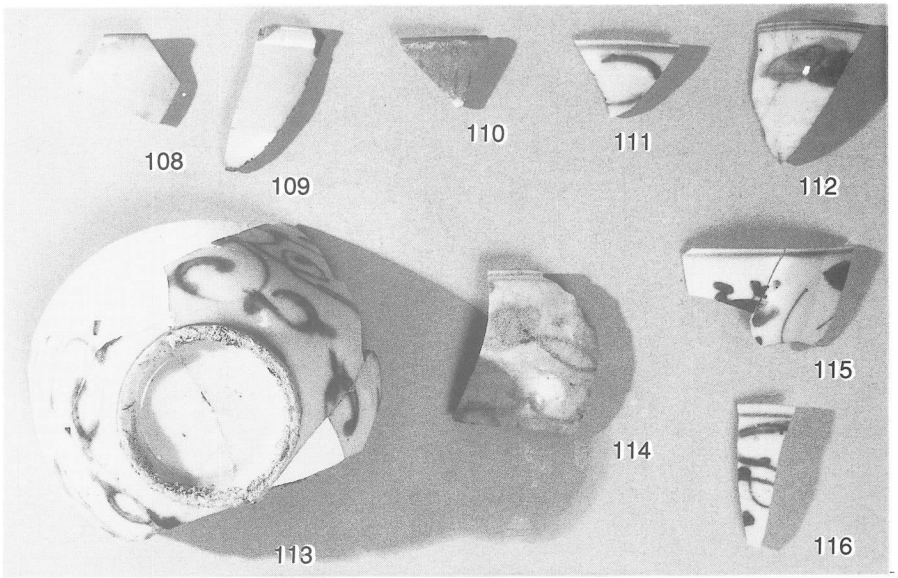
22. 郭２　下層出土遺物（２）



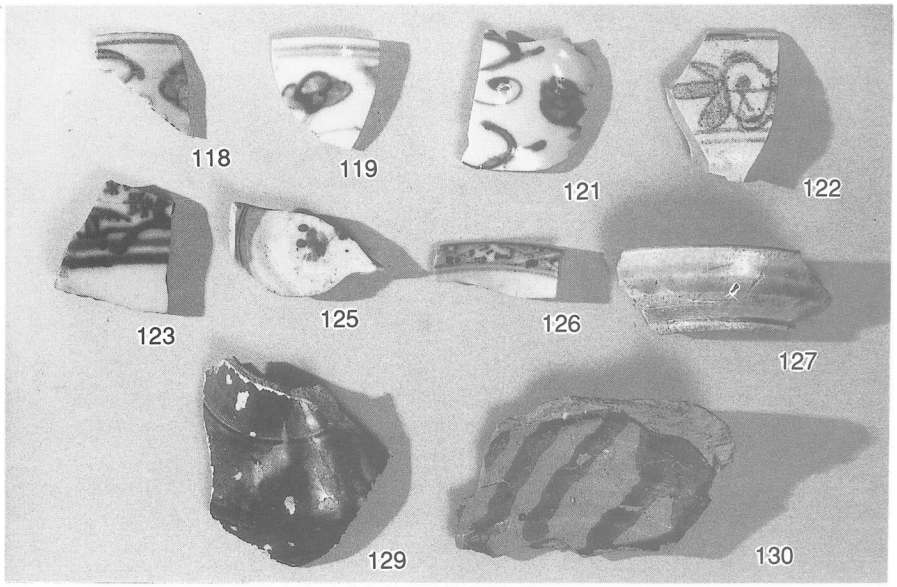
23. 郭２　下層出土遺物（３）



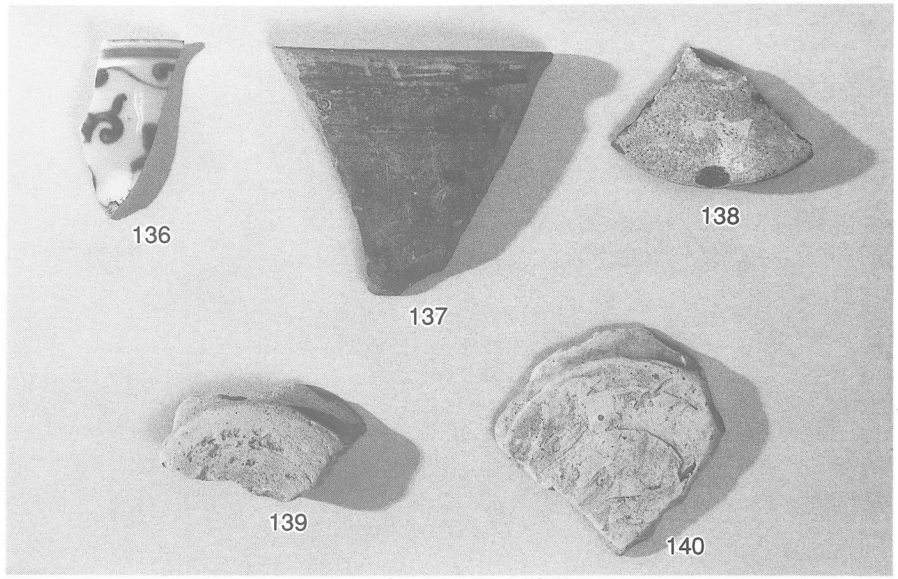
24. 郭２　下層出土遺物（４）



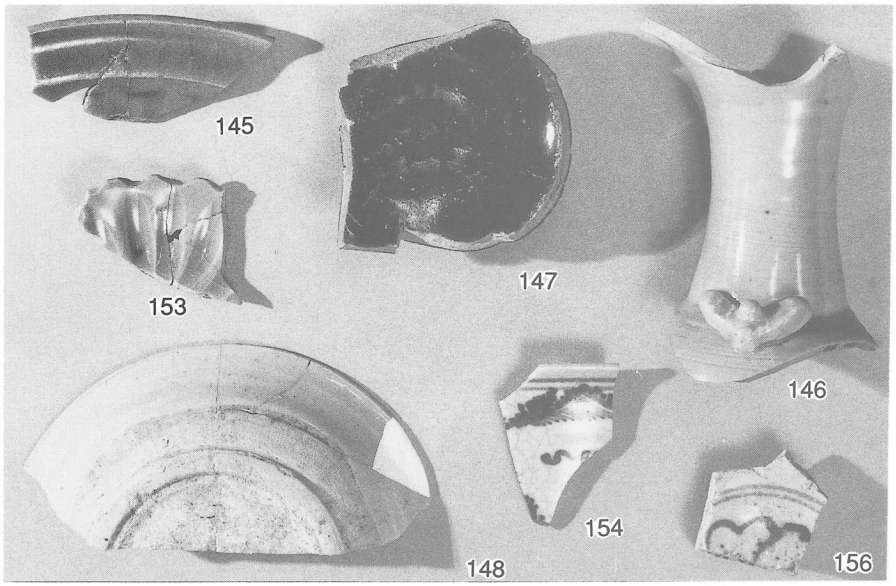
郭３　出土遺物（１）



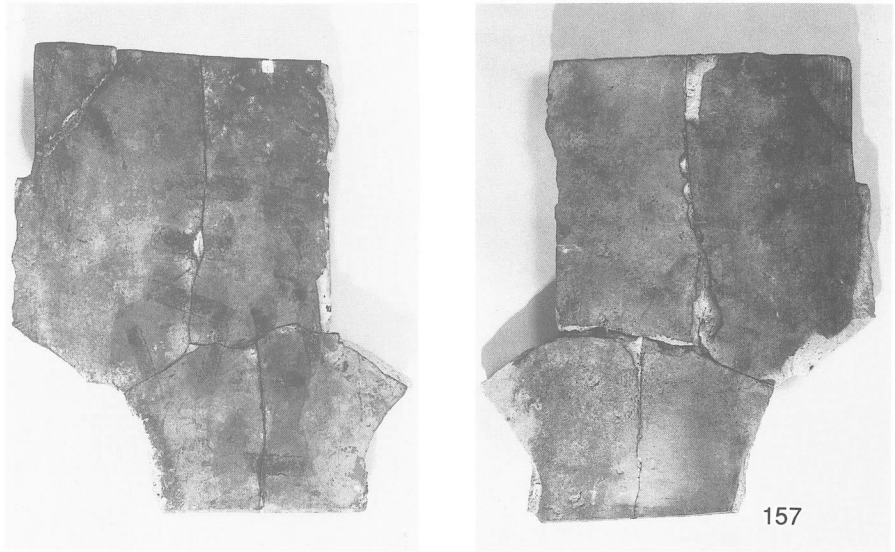
26. 郭 3　出土遺物（2）



27. 郭 4　出土遺物



28. 郭5　出土遺物（1）



29. 郭5　出土遺物（2）

報 告 書 抄 録

フリガナ 書名	タカナベジョウアト シマダチク 高鍋城跡（嶋田地区）
副書名	嶋田地区災害関連緊急急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター
編・著者名	吉本　正典
発行機関	宮崎県教育委員会
所在地	〒880　宮崎市橘通東１丁目９番10号
発行年月日	1997年３月31日

所収遺跡名	所在地	緯度	経度
高鍋城跡 （嶋田地区）	宮崎県児湯郡高鍋町大字上江 字嶋田	北緯32° 7′ 20″	東経131° 30′ 10″

調査期間	調査面積	調査原因	種別	主な時代
960201～960325	1,900m²	災害対策関連	城館跡	中世・近世

主な遺構	主な遺物	特記事項
腰曲輪状遺構　石組列	中・近世土器・陶磁器	高鍋城「下層」遺構

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第５集

高　鍋　城　跡（嶋田地区）

嶋田地区災害関連緊急急傾斜地崩壊対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９７．３

編集・発行　宮　崎　県
印　　刷